

とに過たるをさのかりと迷惑に思ふかた也抄云やとれる人のいへの家人の進退を
はむる也るやのかどのうやくしく禮義の正しさまなるへしといへり恭敬するを
うやともるやともいひやかかりゆるやかにさやかあとのやかに同じくそれめく事にて
やうすをいふこゝにての行義めくといふ意也さるのなめしからぬのにくけならずと
いへりにくけならぬのやかてやさしきをいふにてこの田舎に久しく在て不骨のふる
まびのみ見なれたる目うつしに京近き人のてふりの格別なるを立かへり感しられた
る也

十六日けふようさつかたみやこへのほるついでにみれハやまさき
のたな櫃のちちまがりのおほちかたもかえらざりけりうりひと
こゝろぞとらぬとそいふなる

ようさつかたの夜さりつ方也俗に暮まへといえんか如し催馬樂の刺櫛の歌にようさ
りとり空穂の國讓にようさりかたなどありさてけふ都へ入と夜にまりてと定められ

たれの山崎をの夕つけてたれし也さるのよろつ事をきて國守歸洛の正しさよそひ
もなければいたく忍おれたるなるへし山崎の小櫃の給の附注本山崎のたなる小櫃
と有かたよろしかるへし棚のみせ也近世まで賣物を棚をかきてそれにすゑなら
へて見せし也されの今も棚とも見せともいへり小櫃の今の繪櫛なるへく見ゆ附注に
或人の云女兒のもてあそひ物に小櫃に丹青にて繪をかく也今も京都にて三月上己九
月九日なとわらのへもてあそふ也といへり小櫃また棚の事ハ此頃岩瀬醒か骨董集に
委しく圖して著のせりまかりの式に勾餅と見え和名抄に揚氏漢語抄云櫻餅形如三麻第一
加どわり法隆寺本新撰字鏡に饀飴糖也饀也また餅餅也食也とあるを併せて思ふに大やう
利万加利藤葛のよられたる形したる餅にてさるの飴にてもし粉にてもせしなるへしまかりの
名の勾れる形よりいへるならんにいつれをもいふへき也法螺のさまたらんに
俗にのやかて法螺餅とも法螺の飴とも呼つらんさらてのかく打つけにはらのかたも
云ふといふへからす藤樹の本つかたのあさなへる大綱に似て實に法螺のすかたあり
されの異本はらのかたとあるに従ふへし今おはらのかたとあるのはらの仮字のはら

とよまれたるよりおをそへておはちとよみおせるなるへしさるのまかりのとあるか
 大路によしありけおれのまかもひなせる也されと街道の曲折なるか變らさらん
 何そなつかしむにたらんかつ小櫃の繪とあらへていふへくもあらしさて其小櫃にか
 けるはかなき繪もまかり餅のはらめきたるも昔見しまゝにていさゝかもかおらす却
 てそれうる人の心のかかりあられすといへり凡物のよになつかしきまくのとか
 なき事のうへにのみ多くて中言にのいふへくもあらぬをまひてわりなく書出ら
 れたるか此日記のさま也とそいふなるどの人にねふせて吾心をいこれしおて此外も
 人といとくある人いとくなとあるの大やうみつからいとれし也うり人の諸本うるひ
 と有に從ふへし此一節白詩に萬里路長在六年今始歸所經多舊館大半主人非と
 いへるによくあへり

あくて京へいくよ島坂よてひとあるしきたりかならずしもあるま
 しきわざなりたちてゆきしときよりいくるときそ人いとあくあり

けるこれよもそれにもかへりことす

今日迎へに出たる人の島坂にて酒くみなと歸京をよるこひてもてなしつる也今いふ
 坂迎也サカムカヘかくうけそりてあるしすへき人ならぬの必しも有ましきと誹りさまにいへり
 校異にあるましきわざとい今云いこれぬ事をといとんか如しといへりさて立出し時
 おくりせし人より見れの歸り來たるけふ老人ありといふ猶外にもあるしふりたる人
 ありし也とかく有けるの例の筆つかひにてたとへ世中のとかくたかひかちなる人
 へとかくをさめかたきとやうのとかくにて俗おとうした事かといふにあたり歸
 りくる時のいかてかく人の有けるといふかしみおほめく方になりていふにて最初に
 國人の心の常として今のとて見えざるを云とといへるをうけて聞へき也畢竟人の
 おのか利ある方ならていすまぬといふ意をへり諸本これよもそれにもかへ
 りとすと有に從ふへしこれにもかへりとすとのみにての上をうけたる文意通せずさ
 てみなそれへ返報のせしといふこれよもそれにも島坂にて物せし人よりとしめ
 人のとかく有けるといふ人までかけていへる也

よるになしてみやこにいらんとおもひいらせしめぬほとに
月いてぬかつら川月のあけきよそわたるひとくのいそく此川あ
ずる川にあらぬえふちせきらにいらせりけりといひてあるひと
のよめるうた

久かたの月にたひたるかつら川そこなるかけもかえらざりけり

むつきの月大にてさへわれの十六夜の月もいとく出て桂川を其光にわたられし
也さて淵瀬さらにかいらすと昔も同じさまなるをなつかしみていへり大和なるあす
か川のいと浅き川にて雨ふるたひに其みをすち流れかへりてきこまりなけれの昨日
の淵のけふの瀬になるなどそのかみより歌にもよみて定めなき例にいひなれたれの
今も飛鳥川にあらぬの云々といへり歌の意大空の月の中へ生出たる桂の川なれのや
かて其水底にうつるも同じ影也といふ月のわかきにわたるとある實に今宵月中の桂
川なりけり車なから打入けんにかの少納言か月のいとわかきに川をわたれハ牛の

あゆむまにすいまやうなどのわれたるやうに水のちりたるこそおかしけれと書たる
も思ひあつへしさて詞に淵瀬かいらざりけりといひて歌に影もかいらざりけりとう
けたる其かいらざる物同じからぬか故にかく打重ねたるか却ていみじき也古今に桂
に侍ける時に七條中宮とせ給へりける御返事にたてまつりける伊勢久かたの中に
生たるさとなれの光をのみそたのむへらある此本の句六帖にハ久かたの月の中なる
里なれの有是そまにて正しき也中に生たると今あるハ此歌の挿入也古今に中に
生たるといふも同じ桂の里なるにそれ撰みつる紀氏の又月に生たるとかつら川といと
るへきにあらす中に生たるとしてハ伊勢の歌も通せぬ事よて二つあから光をうしあ
へるハあたらしからすや桂とうくれのこそハ生たるといへ生たるといふ事有へけ
んや又久方の中といひて月と聞ゆへけんや古より月を久方の中といへる事あく里を
生しといひし例なし絶てとわりきけれの也月の中なる里とありてこそ光をたのむと
うけたるまてめてたくハ聞ゆれ其もとの偽撰の伊勢集にはかられたるものなれのな
はるのかみよりの謬にて源氏の松風の中に生たると打すんし玉ふついでに云々とあ

るも此古今の歌のたかへるかたをいへるもの也そのあやまてるいとれのくやしき事
の古今に辨せり

またあるひとのいふ

あま雲のえさむなりつるむつら川袖をひてゝもわたりぬるかな

天雲のはるかといふ枕也さて長き船路のあひたいととるかおも思ひつる此川にけふ
の袖をひたりてもわたると也歸り來たるうれしさをもいふこれも月に生たる名におふ
桂川といふ意ならんに天雲のとるかちりつるといへるにこゝろあるへし

又あるひとよめり

むつら川をむごゝるよもむよいぬとねなしふかきになむゝゝいな
り

はるく思ひわたりける我心おもかよとす相も思ふぬ川なれと猶わかこゝろと同じ
深さに流るゝさま也いかてといふかしむかたによみなせり此三首の桂川つきくか

のつから其語脈つらなれりはしめ久かたの月に生たるとあるにまかせて次よ天雲の
とるかちりつるとのみにひて月の桂川を思ふせ又其とるかに思へるといふ心をうけ
てさとかりの吾心にもかよすといへり

くれば

みやこのうれしきあまりにうたもあまりそねほがる夜ふけてとこ
ろくも見えす京よいらちてうれしいへにいたりて門にいるに
月あがけれいとよくありさまみゆきしよりもましていふかひ
なくそこほれやふれたる

さきおも京の近つくよろこひの余りに云く都近くちりぬといふをよろこひて云く都
近くなりぬるよろこひに堪すして云く都の近つくをよろこひつゝのはる又都はこり
などおまたゝひいへり今の其都にいらんとするうれしさを都のうれしき余りにとは
ふさいひてやかて又京ふ入たちて嬉しといふかくささみて幾かへり書かさぬるに其
嬉しき限りを見ゆるものこらさる中に彼一日片時わすれさる思ひ立となれぬやか

て哀のこもらざる所なきを味ふへしまか忘るゝ聞なしといへともさゝ物のたひとに
いふへきならぬところへ書出てなへてもくみてまれど也されの此日記殊小嬉し
く殊に面白きふしおわたりてのいよく此悲しみある事を思ひてみるへしこれ紀氏
の思ひの百か一つを千とせの後になこむる事也さてうれしき余りに歌もあまりと
たゝみていへる例の也月のあかしといへともさすかに夜陰なれの心あてのところ
どころもまかど見えすと也諸本夜ふけてくれのとあるに従ふへしさて六年ふりにて
吾家のわれたるを月の前お見られたるこゝちいかにそわらんかねて便りにきしよ
りもいたく破損せりといふいふかひなくの詞おもかゝらぬといふ意とへ也きしよ
りましてと句をさうていふかひなくそこはれやふれたるとよむへしましていふかひ
なくとつゝくへからすまして女の船底に云うまして後にいかならんなど上聲にと
なへて句頭におき況やなどいふまかよふ格のましてに之非すさての意もとはらす句
讀もみたるゝもの也けふまして母のかなしからるゝ云うのましてに同じくてきし
よりもまさうてといふ也言のたかりねとつかひさまのかりれるにて意とへ同じから

さる也見ぬくへし

いへどあついたりつる人のこゝろもあれたるなりけりなかがきこ
そあれひとついでのやうなれいのそみてあつかれるなりさるはた
よりことにものえたえずえさせたるこよひがゝる事とこわたかに
ものもいせすいとそつらくみゆれとこゝろさしせんとす

そのかみ心のかゝるを心のあるゝといへるさるの密する情の疎くなるにてたとへ
絹布の織目のふりて紙ひゆくやうの意とへ也今の親切にいひし人の心も疎遠になり
てかそりたりといふを家のあれしにかけていへる例の也抄に中垣の隣のあまひの垣
也此家を預りたるの隣家の賤士なるへきに紀氏の家と垣を一重へたてたる斗なれの
われ預らんとて預りし也といへる考證に絶す便りあるとに家を修葺せん料もかくり
しをかくあふしとてたる事よと也といへるうづはの俊隆に物なしやとへて見え
さめりといふとあるも調度の外に金銀の類なしやと云也藏ひらきに此庫とかりの

物ども侍らんとて云ふといへる物も金銀の事也源氏の松風にさるへき物のわけわた
 さんどあるも大井の家の修理料を明石より京へのはさんといふ也此つゝきにもさ
 るへき物ども奉りてらうし作り侍るをもあるも田畑の地代を出して領しつくる事也
 金銀の諸物の中にすぐれたれたゝ物どものみいひて通する也今の俗にもいふ也な
 はふるくたからといひおほえといふも世にこれよりたどきものなく世おこれよりお
 はえあるものなけれの也さてこの文こよひかく家の荒しを見てあきれたるとと彼
 どなりに聞えるらんを憚りてこわたかにもいひせすまかいふ人々を制しといめ
 しといふ心ならんどの思ひとかれとこよひかゝる事といへるつゝきに今少言さく
 ての聞とりかたしかくても聞ゆる事にや後勘をまつもの也さてかく人わろくいひあ
 とめ金をかくりし事まではしたなくいへるの例の也いどのつらく見ゆれといひと
 つらくの見ゆれといふへき下の文字を上にかくれる意のへおて自然えらへをさ
 すの語勢也たとへのかくつらくの見ゆれといふへきをかくつらく見ゆれとい
 ふも同じさか如し一本此の文字なきの聞なれざるよりこゝろ得かねてはふきたるさ

かしらもなくての文をなす抄にさすかに久しく家を預しものなれの懸志の返報の
 せんする也といへり

さて池めいてくほまり水つけるところありほとりよ松もありき五
 とせむとせのうちにもとせやすきにけんかたえいなくなりにけり
 いまたひたるそまされるはほかたのみなあれはたれいはいれとそ
 人といふたもひいてぬことなくこひしきかうちよこのいへてう
 まれしとんなこのもろともよかへらねいにかよいかたき

この池といふはかりにのあらぬいさゝかの泉水あり又其ほとりに松もありしと也あ
 りきのさの上の水つける所ありにもかゝれのみなまへかたよりありしをいふ也さて
 此うち松の片枝のなくなりたるを五年六年のうちに千とせや云ふたと面白くいへり
 このかの隣家のあつかり人を伐しならん今生たる小松をしもとさらよいへるの末の
 歌のたね也上にいふかひなくこはれたるといへるの打つけに見いれられたる家のさ

ま也こゝに大かたの皆荒にたれいへるの猶たちめくりて庭のたすまひ前裁の
何くれまで思ひの外にそこなえられたるを見られて歎しられし也まか何のうへも荒に
たれいひかし戀しく思ひ出ぬ事なき中にやかて出京已前此家にて生れつる女子の其
おもかけ忘れたきに此たひつれもかへらぬいひかはるかなしき思ひやるへしと也
ふなひともみな子たがりてのゝしるがゝるうちになほかなしきに
たへずしてひそかよこゝろ忘れ人といへりけるうた

うまれしもかへらぬものをわかやとにこまつのあるを見るあかな
しきとそいへる

ふなひともいかにとも解かたし決めて古仮字の傳寫の謬なるへし善本を待へした
かりていたきてをのへていふ也校異云此のゝあるを悦ひさわく也歸京を人々の悦ぶ
中にてなき人を戀泣ん事を憚り思ひてひそかに心えれる人と書れたり心えれる人の
妻なるへしといへり歌の意こゝにて生れし子たにかへりこぬものを其善本にもとな

かりし小松の生たるを見るか悲しきと也

あほあかすやあらん又かくなん

見しひとれまつのちとせにおみましかいとほくかなしきわかれせま
しやわすれがたくくちとせしきことねほかれとえつくさすとまれが
うまれとくやりてん

此歌本句見し人のといひて見ましかのとうけんのとわりなく見しと有てましと重か
るも穩やかならず按するよ此三句似ましかのにて原書にの松の千年にましかのと
爾文字ゆりて書けんを例の古仮字のなたらきたるよりみましかのと見誤れるもの也
さて歌の意願のくこのに見し子の同し宿にかひ出たるこの松の經なん千年にあや
かり似たらましかのかく遠く失ゆきて二たひ見えぬ悲しき別れをすへけんやすまし
きをといふ遠くといへるに土佐にこふり置て歸り來たる心もこもるへしさて此亡兒
の事彼國發船の日より書としめてつひに歸京の今夜にいたり其歎きをもて書とちめ

玉へるにもひとへにこれかための日記なる事いちまるからすや失し兒の悲しき余りに吾にもあらずなりて心のはかに戯れくつかへりみたりかとしき思ひくまをかこれし物からなほ千のひとつにもたらねの猶忘れかたく朽惜き事おほくのこれとさちからえつくさすといふさつとまれかくまれ人にみゆへさものちらねのとやく破りて弄へしと也

文政六年二月十六日住吉の浦勝間の里なる光福寺にありて去るし畢ぬ

景 樹

土佐日記創見附録

妙壽本附注本共にどとこもすなる日記といふものを女もして見んとてするありとあるハ訛也。此日記の全意すへて俳諧なる事を知らねハ文勢たほとれたる文意たしるきたるをもとかしみたるさかしらなるへしさてハ次なるその年云々の文のいたくなたらきたると忽ち語調のえなるをともえ聞知さるひがわき也。又一本どとこのすなる日記と有ハ訛也。此ハ男もすといふとありてハ女もすへき事に聞えてとわりたすと思へるよりさるかたよなほせしなるへしれといひてハやかて調もなまれる物也。聞知へし

○同本かれこれと知らずれくりす云々又其日とさりよとかくしつゝのしるうちに夜ふけぬとあるみな訛也。此ハ知る人を知らぬ

人もといへる意なれハ本書の知るを知らぬとある方まされり又まさりよとかくしつゝのよしとといへるハ船に乗うつりて代語なりさるハ初更なれハ其日といふへきいそれなしかつ其日と記きてハ夜更ぬとつけたるもかなをぬ事也

○附注本年ころよく知らへつる人々なん又一本よく見えつる人々なんなどある共に訛也知らへつるといひ見えつるといへる何の事とも聞えずこハ身つからほこれるあされを知らぬハよく具しつる人々といへるぞこゝろえがぬてとぞくいろひ試みたるもの也

○岸本由豆流か考證云すへて日記といふものハ旅の日記のみならず日々の事をえるせるをもて日記といへり中ころの家記といへるものハ如しそとみな漢字もてあるせれの男のわざにして女のわざにあらずそを今假字もてかけるのめしきわさされハ紀氏自ら書る事をかくして女の書る趣きにてかゝれつる也是この日記の趣意とい

ふへしといへるハ非也もどより日記ハ日々の事を記せるの稱なる事論なし何ぞ真字假字の差別をどのん當時篁日記平仲日記などいひしも真字なりや假字なりやまるへからすといへども舊本の今昔物語に篁の配流の時の事を書く一章ありさるハわたの原八十島かけての歌を擧て次ハ明石といふ所にゆきて云はのしとわかしのうらの朝霧に島かくれゆく船をしそ思ふといひて泣けるなどみゆ尤取かたき事いふにたらねと彼篁日記といふものハ此配流の時の紀行なりけんこのこれによりて暗にあらるいこゝちするおも多分假字かきあらんと覺ゆめり平仲もいみしき歌よみありけんに其日記も假字ならん事おしはからるなは當時菅家紀行増基日記も假字なるを見るへしもどより紀氏の古今序大井行幸序など皆假字かき也今更此日記のかりをめめしとして女にかくるへきものならんやかつ懸るハかり耻へくの漢字もてのれんも亦遅からしはやくより真字假字の説も有しと見えて附注の序に曾聞有就彼所謂男文字女文字二而以日記爲女子之作或疑紀氏代婦人作之者皆非也といひ抄にも或ハ男文字にてする日記を女文字にて書との心也と云説われともひかたを

るへし既に辨しかれたりかつ當時平假字をかく事の後世の如くむけにたやすきわ
さにもあらざりけらしさるの平假字かつく始まれる時にて其字形など後のいろは
の手もきき如きにいまたえあらて半の正しく半のくつれたらんにの中幼稚より
學ひて習熟せる全き漢字のかた便利なる事もや有つらん菅家の記にもいしけきさの
かんなどいふものを女文字につらねてさへみつからもとこはるへきを云々と書玉
ひ諸君此日記の古本の奥書にも不讀得一所多只任本書一也といひ古代假字猶
蚪二などあるによりても當時の假字のさま大やう思ひこかるへし

○考證に加藤美樹云女の方よりいふ故に男もとの書る也と舊説によれるの非也女よ
りいへととてたえて女のすましき事からんに男もとのかけていしれそたとへ男
もさすといふ刀といふものを女もさすといふへけんや男のさすといふ刀といふも
のを女も云ふとかけとなれていして通せぬ事也もし日記のさといへたまくの女
もするものなれの打まかせたる今の世の刀の類ひにあらすといこやかて女もし
て試んといふへきならずわつかもわれ女もする事あらんわさならんに心みん

なとかまへ出てとわるへき筋なくみきいたつら言となれる也

○同書に村田春海云ぞれの年との定かにもさしてわさとおはめかしてもいふのみと
舊説につきて云るの非也何か故か定かにいとすわさとのおはめかしたるや假字書
を耻る故といんいこれなき事既に辨せり伊勢集源氏の發端にいつれの御時とお
はめきていへるのまかるへき事辨をまつへからす今の其故なく況や日記にてさへわ
るを某の年とおはめさいひてかなふへけんやさる故いかなどもとのさるのをさなし

廿二日

○附注本和泉の國までたひらぶよとねかひたつとあるハ訛也こハ
調のうへにとわりある事とらす妄りにと文字を置かへて俗意よ
かあへたる後のさかしら也下のと文字ハはふくへく上のと文字ハ
なくてかなえずあき時ハ都までとか何とそ大やう其歸りつく所を
いふへしまた途中なる和泉國までといふよハと文字なくてハ

たらいすまつ和泉の國までといふべきまづの意此と文字よこれ
は也さるハ句調もなまれるハ其とわりよ違へるの自然也聞さるハ

○考證に眞淵云ほされのされハ洒麗の音也わハあまへるを略していふか源氏にわさ
れたる大君すかたなどいふを思へといへるハ非也あされのされの意ハ正月十七日の
ささきにさける也と云る所に委しく辨せりかつわハあまへるを略せりといへるも
甚おはつがなしやかて源氏の花の宴の時のさまあまへ玉へりとしてかなふへき物な
らんや況や洒麗の字音にあまへのあ文字をとちて付へさるものか

廿三日

○附注本此人國に必しもいてづかばるハ人よもあらざりきとある
ハ訛也こハいひつがふといひあらすなりなといへる今の俗耳よた
ほるかなるより文意句調の優劣ともわきまへすたのかきこゆるか

たよ直したるもの也

○同本心あるものハ耻すきなんわたりける妙壽本をちすきなんき
けるとある共に訛也かくてハ更よ文をなさす何の意とも知られさ
る也抄よ妙壽本ハ心ハ又各別よていと面白く侍るよやよく心をと
とめて見侍るハ今注し侍らすとかけりこハ妙注よ國人のくせよ
て今はと任官の人かえれハかやうよ馳走する躰ハ見えぬものなる
に康教をばしめとして心あるものハ炎よつき冷をさくる事を耻
て我にえなむけするを樂しみて追來侍とやとありこれをしとい
るならめと此注ハ耻すきなんきけるとある誤文よよりて耻すとい
ふを耻るかたよさへとけるハ更によりかたく況や今ハとて見えす
なふとの語を兩段よ裂て今ハといふを任官の人の交替よかけ見え

ずなるといふを馳走する躰の見えぬにとれるなと甚語意よくらし
といふへし何と心をとむるやたらん

廿四日

○附注本新司馬の餞しよいましてとあるハ訛也こハ出ませりなと
敬へるもて講師よいすきたり新司よこそと思へるよりのさむしら
なるへしみなすへて俳諧なるをさるるよりの謬也かつ新司とし
てハ一文字をたよとらぬものしがといへる滑稽のをたらきもいた
つらになる事也本注よ見るへし

廿七日

○一本京よて生し女子こよにしてとあるハ訛也國にしてとたしが
に有へき所也俗耳にハよそをさしたるやうにも聞ゆれハさかしら

に直したるもの也此人國にかならずしもいひつかふものにもあら
ずなりなとある見合すへしそのうへけふハ浦戸をさしてこきいつ
と有てもはや出船の後なれハいよく國にしてといふへき也こ
にしてハいまた館中かとは在ていふ語也

○一本船やかたの塵もちりとあるハ訛也こハたよひぬといへる
か塵にもかゝれるを聞えらて詞たらしすと見たるより散の語をそ
へたるもの也

○考證に或説云こにしてハ國にてうせたるにて京へ上りきハのまにハなかるへし
京へ上るにより同道の女子を思ひ出るよし懐舊の心哀也といへるハ非也此かくする
うちにとあるハ發船用意のうちといふ事まかふへくもあらずまた俄に失にしかりど
いへる程へたる語勢ならんやざるを京へ上りきこの事ハあらしといへるハいかに
見まどひたるにかねはつかなし

○同書に眞淵云都へと思ふも物の云々の歌を宇治拾遺に貫之の歌とせるの後に聞傳へて書しならん今の自らの歌とせず又すへてみづからのをも人のさまにかけると多けれの何れにても有なんといへるの非也宇治拾遺に此歌を紀氏とせるの後にきく傳へたるにのあらずやとり此日記につきてかける也記者の女よりさして或人といへるみな紀氏なる事えるけれの紀氏とせるのみ拾遺の此日記の文に蛇足を加へて例の書みたされたるもの也日記にかくするうちに俄に失にしるのとあるの頓死のさまなる事まかふへからぬをとかく煩ひて失にけれのなとかくれ發船前に失たる事又まかふへきならぬを月ころに成にけれのとかくれたるなど見るへし證とするにたらんや

○同書に眞淵云心あるやうにとの歌よむ心あるをいふへしはのめくの其けしき見えではこりなる意なりといへるの非也はのめくをはこりかど解へきものならんや况やいこれはこりかなるといふへけんやさらに筋なき事也歌よむ心あるといへるも似て非也こりゆるといふかすなち歌よむ事おわたれる也心あるの物とに情あるをいふにてさる人の必さる情を歌ともよみ出るより打まかせて歌よむ人を心ある人と

もいひなれたりさるを歌よむ心あるといふ時のひとへに歌よまんとする心に落て大よそのおもむきいたく違へる事也わきまふへし

○同書に眞淵云口あみの口網おて今の俗語に口おもしといふ如く口に網をはりたりといふ名也もろもちおて互に扶けあふてやうくしてよみ出したる也といへるの非也この歌の打むれてこそといふをさして諸持といへるなるを古來心得たかひて口重くやうくひねり出せる不堪の方に見しよりすへて鑿説のみいひあへる也やかて上に守の館の人々の中に此來る人々そ心あるやうにいこれはのめくなどはめたるにわらすやそれをうけて彼人々といへるを忽ち口重くえよまぬさまにいふへけんや即ちいといたくめていと感じたるにわらすや又一人をかりこそわらめ打むれ來たる人々を残りなく口重き不堪のものにいひ落すも大どれたらすやさらにとわりたさる事也さるから今もいこれはのめくといふをはこりかなる方おまひていひ落せるもの也况や口にあみをとりたるといふ諺なとこの口網に類せるとにのあらず

○同書に宣長云何某云今世に海人のまわさに引綱と云有てそれに口網與綱と云有て

口網の廣さ六七尺とかり長さの五六十丈もあるを海中へそへおきて魚をとるを引
 擧る時に海人ともこいらなみ立て荷ひ出せ也これならんといへうさもあるへし歌よ
 む事口重さを戯れにかの口網の重くてこいらの人のかゝりて荷ひ出すふたとへいひ
 たりけんといへるの非也かの人々の口網もろもちにといへる手輕き口調を聞知へ
 し眞の口網といふ物を求め出て證すへき文のさまぢらんや畢竟口のみもろもち小
 て此海邊にて荷ひ出せるといへるの打ひれ來たりて此うみへにて引とめんとせる
 歌の意をとけるのみといふ事をまらて歌一首をよりたかりてよみたりと思ひたかへ
 しよりの謬也かくわかれかたくいひて彼人々の口網とつゝきたるにも今まとしと人
 人口々にいひしといふ事明らかなるを見るへし又海中にてへたる網を物せんを引
 擧るとか引よするとこそいふへけれ荷ひ出すといふへけんや荷ひ出すのこあたよ
 り持出す事論なきをや此口網のきとめて當時の諺なるへき事本注に辨すたまへし妙
 注おかの人の別れをしむ事諸心にて共にいひ出せる歌おれのふやといへるのわた
 れり

○或説口網との小き網の事也今も土佐の浦人の口網と唱ふるよし也深邊の漁者の尻
 搔網といふこれ也といへるの非也尻かき網といふのかり小き網なるをいかに譬へな
 らんから諸持にて海邊にて荷ひ出せるといふへけんや思ふへし

元日

○附注本風に吹なくさせてとあるハ訛也風に吹なくさせてといふ
 語あるへきならんや又吹なくさせて海にいらぬいとつらぬいたるハ
 物ならんや又一本風に吹流させてとあるハ訛也風は吹ながすの語
 のとゞれをぬハ更にもいえず是も吹ながさせて海にいらぬといふ
 とわりあるへけんや畢竟吹ならさせての語意をえきとらざるよ
 りのさかいら也

○同本坂田めしなしとあるハ訛也さかためといふ事有へうもあら
 しこいをかためのを文字を古假字の見にくきよりをに誤りたる也

の也又あらめも坂田めも同じ海藻なるぞかきぬいふべきならず

○妙壽本九重の門のとあるハ訛也さらハ九重の御門と書へしかつ九重の門と打出んもことごとくさう詞のうへ打つかぬことちするに大やう大宮わたりを思ひやらんにハ猶いつくも有ぬへしわつかに注連繩の緇終をいそんいた坊間の小路なる門戸のさま似つかハしく兒女輩の思ひやるにたりぬへしをゆる紀氏の家居し給ひし勘解由小路富小路わたりの小家のさまなるへきにやいかにとそといひあへるといへる打つとひて語るらんさまたのつかられたとなたぬことちして白馬子日と思ふつらにいひとつに聞なつかたし

○五井純禎云わしわゆもし思ふやう云ふの貫之國守なれとも何もたくのふる事なく廉潔の循吏なれりなきに事たれるを吝嗇など思ふんやとも解へしといへるハ非也かたより思ふんならんころの吝嗇ともいそめくゆるハ鮎の思ふへきならんや其筋

たぬ事也

○考證に上田秋成云押鮎の今の干鮎の事にや又別に製わる物にも有へしいつれにも喰つき難き物故人の口つきさまくむつかしけなるを見るにも其容のあやしけあらんを心おかけて物のなすへかめるをど用意のはと面白き書さま也といへるハ非也押鮎のかしら何ぞかりか喰つきかたからん口つきのさまくむつかしけならん事おはつかなしすへて紀氏の日記といへるより事から正しからん物に思ひとれるの謬也いつくもわれと此章ハ殊にいみしき戯れなるをきくまらすまひてみき教へたちたる筋に説きめせるのかたはらいれし

七日

○同書に眞淵云青馬といへると實ハ白馬也古言に白きを青といへる例青雲の白肩之津といひ又青旗といへるも全くのまらはた也といへるハ非也青雲白肩之津といへるかゝて白きを青といふの證となるへき同人の冠辞考云此青雲ハ本白雲なれハ白てふ語に冠らせたりいと晴たる蒼そらにある白雲ハ青く見ゆるものなれハ即ち見るま

に青雲といふ也青雲の棚引日すらこさめそは降とよめる此意也といへる例の出るにまかせたるにて何事ともわかれず青雲の青天也空に見ゆれいまどらく青雲といふのみいかて白雲の事なふんよし青雲の白雲にもせよ白きといえん爲に青雲とかくとわりあるへけんや又蒼天に輕引白雲といよく白くこそ見ゆへけれ青く見えん事いかあるひか目よのおはつかなし青きに白きのましらんと解明なる事常也青山をよこさる雲の灼然といひ江碧鳥逾白ともいへるならずや又青雲の棚引日すらといふのさちかりすくれたる高山にの青天といへども霧雨の降をいへりさらにこゝにあつかる事にあらず又青旗といふも全く白旗也など云の更に據もなき事おていふにもたらず青雲白肩之津にの別に辨あり

○同書に眞淵云いたかりての物をはひるやうにてそしる詞也といへるの非也いたかりのはひる方にいとんの論をしそしる方にいへるをさかす況やはひるとそしるをかねたらんいとおはつかなき事也按するにこれののみいたかりといふこれののみを歌の事也とさしたかへるより例の間をわたすの注解をなせるもの也これのみとの破

子の事をいへるおて歌の事にあらず

○同書に宣長云まるとのこれおのれなどいふか如し師の説に自身まるといふ事のかしこきをかど有といふにむかへてかどなくまると云意おてつたなく愚かあるよしの稱也といえれたるのいにしへの物いひとも聞えずからこゝろめきてこそおはゆれといへるの非也まるといふこれる自稱にて我己などいふか如きにのあらず枕草紙にくさものとある所に御前にて物をいふともきこしめさんになどてかひまるとかといとんといへるもあめしさをにくめる也委しくの本注に辨せりさのいへ其本の典退の意より出たる語也とまらるゝにいかどあるといふにむかへて拙く愚かなるよしの稱也といへる師説の中へすてかたしかどしき家にむかへて丸屋などいへる類ひ多く虫獸の稱にそのかみ何まるといへるもまゝあれの也

○考證云おきな女といひて老女の事とのみせる證もあり枕草紙よあきたにもおものまゐるうら山しくかたゝののみなまゐりぬめりとくさこしめしておきな女におろしをたに給へ云とあるの老女をのみいへりといへるの非也此文も老夫をおきな老

婦をみんちといへる事論なきをみんちをいんな或の女と書て假字を辨せざる普通本に惑ひたる誤也この語の關白道隆公の例の御戯れにてなきなと即ち身つからを宣ひみんなどのかたへにみんちす北の方高内侍を宣へり高内侍の世に儀同三司母といふこれ也此時御二方とも御齡いまた老玉とねと御女子達のいとも若きに對ひて然きたなけにいひなし玉へるいとみんちのをかきしき也されどみんち草紙に其かたはらのかきな人たちとあるの年たけたる女房達をいへりと聞ゆれの後にかよとせていへるにやとも思ふるれと此草紙異本まちくなれのかきな人のかきな人の寫誤にもやあらん善本を求むへしいつれ老女を打つけにかきなをなんちといとん甚おはつかなし

○抄云海をおどろかして浪たてつへしとの文選海賦云於是鼓怒溢浪揚浮更相觸搏飛沫起濤これにもとつけるなるへしといへるの非也このもと附注に此文選の文を引しよりの謬也すへて附注の漫りに故事を引出て然もわたれるの少き也今の船中に腹鼓をうつといふより其響きに海をさへおどろかして浪をもたてつへしとつけた

るのみいつくかり此賦によりたる鼓怒とあるを腹鼓のゆかりなどに思へるにや起濤とあるか浪たてつへしふあへりといふにやいと覺つかなし

九日

○妙壽本我すゝきにてとあるの訛也我薄とつゝけん語勢有へきならす又自他をわけん事こゝに用なし然も春の野よつみて我ならぬと吾薄といふへけんやとより春ならんよハ若薄なるへく言からもみやひたるをやもしやわらかなる若薄よてハ手をきれしとなど思えんハ俗意也まゝしてこゝうたへる歌にして實事ならぬハことわりとせめきるへきにあらす

○同本これなみに多かれとかゝすとあるの訛也これなみに多しといふ語有へけんや又これなみに多しといふとわりきこゆへきなら

んや

○或説にふみしなけれのゝもとのあとしなけれのとありけんをわやまてるなるへし
 ざるの跡しと字にて書し其跡の字を踏とみそんしそれを又ふみと假字にかきわやま
 り來しもの也といへるの非也まづ跡しきけれのと事もなくわらんを踏しなけれのと
 異やうなるかたに書そこなんも物遠くさりと踏しなけれのといふ詞世にわら
 こそのふとも書誤つへけれふまさる意をふみしきけれのといふへき語意たえて有へ
 きならねのいよ／＼おはつかなく又人の往來の必其ふむ跡につきてまゐるへき物にも
 非す又此歌本のまゝにて聞えさらのこそひてさる説をもちかち出め文しなけ
 れと有にていとをさなくせまれるこゝろみゆるものをやもとより此歌思ひやると
 いふより心を使めかしたるものにて船にも思ふ事有といへる其思ふ事をつけやらま
 はしきの意なれの文ならてのかなとさる也只心のわたりを見せんといふよわらす辨
 ふへし

十三日

○抄云此一段義分明ならず何のあしかけとの芦蔭といふへきをふと忘れて何のとい
 ひたる詞をすくに書つゝけたるにやはやのつまのいすしとの穂屋の妻の蝙蝠フクロ也和
 名の貝類云蝙蝠フクロ 和名 其貌似フクロ而大者也うみへなるあしの穂にてふける屋のとしつ方
 に有ものともをいふといへるの非也芦蔭といふ事を忘れたらんならたゝ何蔭とか
 何の蔭とかいふへき何の芦蔭といふへけんや又いすしを蝙蝠フクロとせるも受かたしい
 かに古假字ならんにもいるの仮字まかふへきにあらすかつ蝙蝠を鮎アサギにまたる事をさ
 かすさらの又保夜ホヤの交マユの蝙蝠フクロすしといふへきならず保夜蝙蝠ホヤフクロの交鮎マユアサギといてのかな
 とす又はやを芦の穂屋とせるも物遠きにさる軒端に物こそあれすしをしもかけね
 かんものかと思ふへし

○考證に眞淵云何の芦かけの或説に何やらのみかけによらんとてといふ意あるを海
 邊なれの芦蔭とつゝけたるの君か御蔭ふます蔭のなしなど云に同じ云いすしの蝠
 蝠にの非す和名抄に貽貝爾雅注云貽貝一名黒貝ツロカヒ和名伊加比 延喜式主計式貽貝保夜交鮎と
 あり蝙蝠フクロならぬ事あるしといへるの非也或説何の芦蔭を何やらのみかけによらんと

いへる何の事ともわかれず又芦蔭とつゝけたるか君か御蔭にさすかけとさしといへる歌に同じといへるも何の事ともえられずたとひ其古歌に同じくともこゝによしなきものにて皆すへて筋なき事也但いすしを蝙蝠ならずといへるの然るものから更に貽貝也とせるの猶謬也いすしの飯鮓なる事本注ふいへり又いかひの貽貝ふて只いといふものに非ずされの昔も今もいかひといへりいどのみいひて通すへけんやたとへハ蚌蛤紫螺子の類ひ貝といへても貝の稱なる事えるけれど和名にも貝とそへていえず或の文蛤鳥貝の類ひ只いたやからすとのみいふへからねの貝の言をとなたさる也又鮓とつらなる音便にいとのみはふさていひおれたらんともたすくへけれど齋宮式主計式等に貽貝鮓と見えたれ之猶當時いかひのすしととなへし事論なし今も鮓のすし鮓のすしなどいひて鮓すし鮓すしとたにいとす况やいそしとはふきつめていふへさよあらし

○考證に谷川士清云五雜俎に海鼠一名海男子其狀如男子勢一然淡菜之對也と見え余皇日疏に文嚙似女陰と見ゆ文嚙も淡菜也いかひをいふ又東海婦人の名あり云々

此の陰陽の形に似たるをもて妻との戯れいへるなるへしといへるの非也海鼠の今俗ハ生海鼠といひて所謂男根に似たるもの老海鼠ハ女陰に似たるものにて陰陽の違ひわれハ老海鼠の注に海鼠を引出へきにハあらず老海鼠ハ紫黑色にしてまかも微毛生て其口を開く時の更ハ一片の朱色をふくみてまゆきまで女陰に似たり海鼠の男根ハ似たりといふハ大よそ打見たる形をいひ老海鼠の女陰にかよへるハ子細に見たるうへ也されハ陰陽の違ひありといへどもと全跡ハ同種類にて和名にも海鼠老海鼠海月蝙蝠とつらねて殺さく頭尾なき物の一列に擧たりされハ海鼠と老海鼠の文字もまたしくさるから今もあやまりて引出たる物也種類と文字に泥ますして其實物を見てそれく似たる所を見わかつ時の又更にかよへる物にハ非ずされども其海鼠といふ物に數品あり老海鼠といふ物にも數品ありて老海鼠の別品を海鼠とよふ國あり海鼠の別品を老海鼠とよふ國たかひにあるハもと同種類あるハ故也其同種類なるより男勢女陰の狀も又こゝく見奇して一定せざるに似たり今こゝに擧たる紫色微毛にして女陰の如き物の若狹の海人の保夜と稱する物也主計式にたまくと貽貝保夜交

船スシとあるも即ち若狭國の調進の内なれの昔今必其物かたるへきにもあらしされの又證とするに足さらんやのすへて貝類の大やう女陰に似たるもの、其中につきて殊更にかよへる物又數品ありさる中にしも保夜をかりまたしく似たる物かけれの専らこれを用ひり賄貝赤貝是につくへしいつれ今海男子を引出て陰陽の形に似たるをもて妻といひへるなるへしといへる文意何の事ともえられず男女の根をかくす事常なれと女の殊さらに恥るをもて其わらひるゝを云に與あるなり畢竟諸注此章の思ひ離れし滑稽なるをえらねの取つかんとしなきまゝに思ふすなる説をのみ口に任せていへるものなれの打合さるもうへ也けらし

十四日

○純禎云錢なけれの云々の國守の廉潔なるによりてあらんかといへるの非也廉潔なりとて國守はかりの上にして魚かふ錢をなしといえんやみ奇俳諧を見えらさるの謬也廉潔の食ふさるをこそいへ錢なきの謂ならず

○或人云紀畧延喜七年十一月三日詔改寛平大寶錢貨文一爲延喜通寶一以當舊之

十一新與舊並令通用と見え扶桑畧記裏書延喜九年正月廿七日常平所發充寛平錢一升別三文可沽之由下知天下と記せりこれの錢の價のいと高かりし時也此價を延喜錢に移せの一錢穀三升三合三勺にあたり是にてまつこの頃の錢の位のたかきをえらへし寛平錢の並行れしも此ほどこそあれ後のみな鑄削して延喜錢に成されたり又延喜通寶の鉛錢を造りて銅錢に交行れしかの錢位いたく賤しく成て交易の便あしく成しやうに聞えたりされと延喜式の主税寮ホ鑄錢年料銅銀備中長門豐前三國毎年採進とそ載られたる貢數を計るに一年の作數纔に一千二百五十貫文の料也天長の中頃より承和の始までの富壽神寶承和昌寶など年ごとに一万一千貫と類聚三代格に見えたるを思ひくらふれの延喜の時の錢の乏しかりし事も又其乏しきにつきてのむけに位なきにもあらしめらる事ものつからおしとかられたりされの錢といへの一錢にて今の三百錢をかりよも當れるおれの一次の野菜の料とにあたるへきにあらさる也よりて考るに此舟歌フネウタの或説に二章也といへるに從ひて菜の價にあらすすとすへさかといへる此説非也凡春歌ハルウタ棹歌サカボウ或の田歌タウタ樵歌シノウタやうの類ひの國所クニトコロの地勢チセを從ひてよるくよ

り論ひ來れる自然の一節定りて其歌章もそのかみ作りなせる物にして人の聽をよる
このしむる一時の流行の街謠に異也され其頃はひの錢の價舟士の歌よ合とすとて
さらにあやしむへきにあらす又此舟歌二章となす時いつかたも片となりてこと
わりたりさる物也かつ離つへからさる語調をも聞知へし

十七日

○或本にききしにきけるなりとあるハ訛也ききし見きしなど
いふハ半き半見たる事にてたとへハ本をききて末をきかす始を
見て終を見きりし也とかなかハならんにハ誰にて聞き見きる
へきに非す女にのみ限らんやハききしにきくといふ語意も有へ
きよあらすとわりたぬ事也きりとも此詩をしつかたをととなへて
やまハ強て然もいをめ全句をきくようたへるぞや

○或本風も吹ぬへしとあるハ訛也ハ文字ありてハ此打つけのけし

きを失ふ事也いさゝかの緩急といへともけしきの轉變せる事いふ
もさら也前に汐みちぬ風も吹ぬへしといへる類ひならんや

○或本此あひたに雨ふりとあるハ訛也ハ文字ありてハ入船の後猶
ふりたりともきをゆる也この朔日の所にあしたのま雨ふりとある
に同く其あひたのみ降し一村雨をいへりすへてハ本注に見るへ
し

○純禎云ききされハ此詩句を昔なくさみの如くに聞し也今ハ直に目に見るとなるへ
しといへるハ非也左禮ハ正實ならぬの語なくさむハ心のやわらく事にて似へきもの
にあらすよしさる方にすともなくさみにきしといをんにハされききにきける也と
打かへさてハ通せず聞されといひてかなふへけんや

十八日

○或本たつなみを雪が花かと吹風にとあるハ訛也この吹風をえが

るへらなると打合ふてにを也吹風にはかゝるへらなるといへ外に然えからずるものなくていきこえぬ事也

○或本あるひとのまたきよてふけりてよめるとあるハ訛也聞ふけり見ふけり或ハ道にふけり色にふけりなとつらねていへと只ふけりてとのみえなちていふ語有へからずよつ又の字不用也こハ前よ又人のよめるといひ心やりによめるとあるにあたりて又きよてといへる又の意ならめとめをかり語を隔ていひへらぬ事也況やこれハ何かと評するをきよてといふにて歌をきよてとつけたるにハあらざるぞや

○或本いとけしきあしくてえますとあるハ訛也けしきあしくハ笑まざる事もよりなるにけしきあしくてえますとつらぬる語勢も有へきならず

廿日

○一本いとわひし夜いれぬす廿日夜の月出にけりとあるハ訛也かくてハ夜となれハねられすと云意にて連夜の事となれる也こハいつもあれと今宵殊更に感ありていとねられぬまゝに遠き昔をきへ思ひ出られたるなれいとまひしいもねすといふハ今夜の打つけなるとハかなえざる事也又廿日の夜と夜の字ありてハ句調たしるくを聞知へしかつ廿日の月ハ外の七日の月八日の月なとハハたかふ意あり十五夜を望といふより十六夜をいさよひなと次々十七十八十九それく名ありこの果なる廿日なれハ自然廿日の月と名の如くいひならひて大やうをつか月なといえんよ似たりさて居待月なと萬葉よ見ゆれハすへてもふるき名なりかし次よ廿日の夜の月いつるまでといふとハ同じぢらすぬれハ廿日の夜のとぎり

て月いつぶまでそありけるといふよて廿日夜の月とつらぬいふ
意に、いあらずきて、い調もなまれるもの也

廿一日

○一本それかうたふ。うたとあるハ訛也わらハのうたふなれハ舟歌
にあらしと思ひて例の後よいろへるなるへしこいとりし船子と
ものうたふにつれてこそとあハいふなれ異さまの一ふしとゆくり
なくうたひ出へきよ非ず

○考證に眞淵云はろけハ大方といふ詞也されハはろけならぬ願ひにと有へきを
かくいへるハ此ころの俗語にハはろけならぬといふへきをならぬを省きていへる俗
語をもて書りと見ゆ源氏物語にもかくさまにいへる事あり凡俗語にハいひかれし詞
ハ理りなくはふきてつかふ事多し今もまかりかゝる詞ハみやひ言にあらすと去りて
とさまふへしといへるハ非也ハはろけハはもハはかたハはもくと同意なれハと

なれたる事ならねどハはろけを大方といふ詞也とくへからず又ハはろけハハは
ろけならぬを省けりとせるも一わたりきこゆるに似たれどなは然らし凡詞ハいひな
らずまにへ思はえずはふかれゆくものにて即ちそのかみの馬の鼻むけといへるを
中頃より只鼻むけといへりおはいにしへとは是も馬の鼻むけの祝などといひけんまか
始めハ全くして後とふかれ行かどわりのまへ也此おはろけハ其例なふすはやく此
日記におはろけとのみ有て後との物語に又ハはろけならずといひ又ハはろけとのみ
もこもくいふに其けちめありてみゆめり同言をあるハとふきあるハ全くいひたる
にハあらずかういひならし來てはふけたるにもあらざる也猶愚考と本注にいへり又
詞をハふきいふを俗語として今も俗語をつかふとせるハをさなし詞のたらしたるを
雅とし詞のとふけるを俗と思へるハ後世語言の道をまらざるの弊也詞ハいたくはふ
けたりといへども尤雅なるものありわくまでたらへりともむけに俗なるものありた
た調のとへのへるを語言の道とすこの別に論わり宣命等の文などの昔も今も全くこ
どわりをつくせるハさるいとれある事よて雅俗を論するのかさりにあらず

○純禎云くろきどりのもとにまろき浪を云く此楫取の詞を後世の歌よむとかりの人
のきくても氣のつかぬ事也黒鳥下白浪寄と文字の對するか面白さにきく咎めたる也
古人の詩賦を能せし故也今時の翁まからんやといへるの非也この只黒白をひかへい
へるを聞とめ玉へる也とくしう文字おなほして後賞せられたるならんや况や詩賦
を能し能せざるのあつかるへき事かこのこれかりに昔の翁をまつへけんやもとより
是の楫取の口合クチアヒにてかれらとちすら聞えることなるをやこれを聞えられたるをもて
紀氏を譽るの笑ふへしこの只いづもされそみいひかひすとの聞くるしうひなひたる
にたかひて今のあやしうおかしみあるをよと聞とめられしなり

廿二日

○妙壽本こきてゆく船にし見れいといふ事也船よてといふ事を
船よしといひて聞ゆへけんや舟にて見れい船より見れいといふ
事船よし見れいといふい舟に見れいといふ事にていたく違ふ事也

廿六日

○妙壽本六帖に引舟れとあるい訛也かくてい本の句は只ほてとい
ふ事の序となりて人の手をほてといふになれり又帆をこえて手
打てといふにふるれるよやいと覺束なしこい嬉しかりと濁るよ心
のつらさるより解わつらひてのに直したるもの也

○考證に宣長云ぬさの神に手向る物をもいひ又祓に出す物をもいふ名義の禰布佐に
て事をこひねくとて出すよし也ねさふをつひれのぬさなる也祓のぬさも其罪穢を
除き清め玉へとねく意めて出すなれの神に奉りて祈くと心へ一つ也さて布佐の麻
也古語拾遺に好麻所生故謂之總國古語麻謂之總也今爲之上總下總二國とあり
といへるの非也ぬさの名義禰布佐ならん事甚覺束なしまつぬさふを約めてぬとせる
の中のさを省きて上下のぬふを約むれのぬにあたるより所謂三字かへしの例なる
へし此三字かへし或の五字かへし七字かへしなといふの五十韻の本軀をえらさる安

説ふていふにたらず又麻をふさといとん事も甚覺東なし麻をふさといひし事古も今も見える所なし古語拾遺に擧たる古語といふものハ大やう廣成の造意に出て牽強附會の説のみにしてとるへき事尤すくおし是をしも正しき證として引出たるハあちさなし或説にぬさと幣帛をいへるの稱なれハすなちふさ也大方ハそれに御をそへ大をそへて御ふさ大ふさといへるを音便にて御ぬさ大ぬさといひなれ來たるよりひとへにいふにもぬさとよふまでうつりたるもの也といへりこれも又同じ意に似たれと前説にいまさうぬへし

卅日

○妙壽本神佛のめくみ恤アハレムに似たりとあるハ訛也こハからく神佛をいのりてとある首尾なれハやかて其加護を蒙むるとうくへき事論なきとや此妙本ハ妄りよ文字をそめたるものなれハかへるひがわさ多し心すへき也

二月五日

○一本たけともくとあるハ訛也萬葉大舟乎荒海爾撈出八船多氣といへるたけハこく事かとも聞ゆれと上も撈出とあるをやめて多氣といひがへん事甚たほつかなくかつ此歌の外に船をたくといふ事所見なけれハもとより證とハなしかたしたとひそれにもあれ更に當時の語にあらずされハ此語前後あまたあんなれといつてもこととのみ書るごころはかりたくといふへきものならんや思ふへし今ハこげともととげともと假字のいとよく似たるよりよみあやまてる事論なし或説にたくハ浪を凌ぐといふといへるハ此記と萬葉の歌とにたしあてといへるものにていふにたらずによそたけハ手擧の意にてさるハ兩肘をのへて物するといふ稱にて萬葉古今の歌に往々見えて更に凌ぐやうの事にハあらざる也況や大舟乎荒海

爾云くとよめるハ今荒るゝ事にハあらず荒野荒山の荒よひとしく
やがて荒磯なと、同じ意にてあらうみといへる也くハしき事ハ萬
葉に辨せり

○一本神のこゝろをあるゝ海にとあるハ訛也此歌神の心のあるゝ
とがゝるにこそ調へも味もあんなれ況やかつハ物の始めのあらハ
れたるをいふがもとにてかつ見し人あつ散花なとよめるわつらす
こしの意をへ也海のれもて忽ち平らきて鏡の如くなし玉へる神の
心をわつがよみしといひて叶ふへけんやさて此見つるハ俚言に爲
て見たいうて見たなといふ見たの意にて受玉ふへきや否やまつい
れて見たるといふまで試みたるをいふ神の心のあるゝ海ハ今日の
前にあるゝさま也さるハ其語調のうきたるにもいまた風波のさ
わげるほとならんぞハ聞えるへし納受ありし神の心を見きため奉

りしといふ意ハやがて次にめらうつらく鏡に神の心をこそハ見
つれと打まつめてものたまへる也かはかりの文に全く歌と同じ事
をしも打かきねて書へきならんやされハ風波をさまらさるさまの
歌なる事ハ歌の意をさる人明らむへしきるをかくも打かへして前
後にせられたるをいかにといふに此歌を神納受有て忽ち風波のさ
きたる事ハ世よもいみしきわざなれハ例の書まといして其たふと
き奇特をいこよよあらハさる物也すへて已がうへとハ愚か人に
なしていとよはかなき事をハ誇りかに自負し實は賞すへき筋をハ
むけよいひ落しなと其眞を失をしむるか此記の意也此一節の句つ
つきを試みに忘たうへと置かへて海に打をめつれいと口をし
或人のよめる歌ちハやふる神の心れあるゝ海よ鏡をいれてかつ見
つるがないたく住の江忘草岸の姫松なといふ神よハあらずかしを

れハ打つけに海ハ鏡のとなりぬれハめもうつらく鏡ハ神の心を
こそハ見つれ楳取の心ハ神の御心也けり かくつらねて意得れハ
歌の本意明らか見ゆる物也本注にもいへるを引合すへしとよ
り此神ハ海上往來の船を守らん事を誓ひて此所に鎮座まします事
申もさら也何を漫りに風波を起して人をしも惱め玉ハん此暴風ハ
昨朝より催して楳取ら雲風のけしき甚あしとて恐れたるか今朝ま
てこらへし也時しも住吉代浦にて吹出たれハ神の咎めなといひさ
わき祈り代爲に打入て奉れる鏡をしも神の貪る方にいひなし其方
より書みたしく大神をさへけりいやしめあくまであされくつかへ
りて風波の中に跡を晦ませるものから其光さすかに顯れていちし
るきを見えへしとて其神の領玉へる海上のあらぶるなれハ
やかて神の御心としかつ楳取のさるかたにいひなすまをうけて

神の心のある海とよみたるるか即ち歌の歌なる心よてこれ却
て神明の感應ある所也こゝに記きてハ尤論あり常人のうかひと
るさかひにあらずえやくも蟻通の神前にしてありと星をハ思ふへ
しやハと其神の御名をしも物の名によみ出玉ひていとたそれさま
なるに馬の病たち所になほりしもあやしからずや思ひあをせて思
ふへし抑かの蟻通の事ハ家の集にまきしくいて、世に知らぬ人か
くめてたふとむめり此日記なる住の江代風波の忽ちよ和みし事ハ
歌のたもてに灼然といへともそれはた滑稽の爲まかくれて見る
みるまかとも知人なきハまた千載の遺憾からずや
○妙壽本住江の忘草とあるハ訛也こハ岸の姫松にむかへてこよ
もの文字をくハへたるまがしらなるへし打つけの對句をこのまぬ
か紀氏の筆格なるうへよきてハ口調もたしるくもの也

七日

○異本くやしがる中にいりてぬにけりとあるハ訛也くやしがるうちに入てぬるといふとわり有へけんや

十六日

○諸本見し人を云々とあるハ訛也こハ見し人のとありてハ見ましかいというけかたきかゆゑに人となほせし後のをかしら也

知文堂叢書

藝文之篇

鳥川景祐夫人著

中
室
日
記
全

大坂

圖書出版信託社發行

我師去年の春より鳥がなく東のかたよれもむき給ひ
にきほふ江門の旅舎にいませしか神無月はかり伊勢
尾張のわたりまで登り給ふ事いてきぬその道の日記
なりとて此ころとりつたへ侍るをみれを又數をかき
り往かふ旅人のつらよをあらて名くハしき海山けし
きある所よにを玉鉾の道をまけても立より給ひ歌と
よみ文とかきて時をよしますものし給へれを申よれ
のれ行たらんよりもとのさまくハしくてあかすもめ
てたくを見給へ侍る其くたり給ひしときのを從ひし
門人何かしおふるしてかしくよとよまれりと此卷か

ならず社友みむとぞあらそひ望むへけれとあらめし
め様にゑらせれたき侍るものなり文政二年きせらき五
日文室康奉謹誌

中空の日記

ことし春ささらきの頃より、江戸にまかりとまりけるか、まのらくいせの國へまかり
のはる事いてきて、まつ尾張の國なる津島までとこゝろさす、こん春をんまた江戸にか
へり來をんするもの、かのわたりよりは都の方はとちかく、いとんや待人なくしもわ
らねえ、やかてそなたさまにかへりてんする事もやど、あやふむ人のみおはかめれ
は、あかくいそてゆかんこそはいふにまさらめとて、またしきかきり一人ふたりに
かりてきんひそかに出たつ、時をかんな月廿日まりみかの日なり、目白蒸なる愛松軒を
わかれ出るほと、おもふ事多し

立出るわか袖たよもまらぬかなこゝろのうちには落るなみたは

臺の方を見やるに、とるく冬かれたるさままつ身にしむ

まのしども人はとめぬかとしてをの尾花とかりそ打招きける

随ひゆく人の菅名みさを、石田のりひて也けり、愛松軒のあるしなる兎山のりしけ、越
の國なる柳下きよたけも、さるへき所まで送りせんとてともにきたれり、さてきよたけ

文正康平御書

中空の日記

ことし春ささらさの頃より、江戸にまかりとまりけるか、まのらくいせの國へまかりのはる事いてきて、まの尾張の國なる津島までとこゝろさす、こん春あんなた江戸にかへり來せんもの、かのわたりよりは都の方はとちかく、いとんや待人なくしもわらねと、やかてそなたさまにかへりてんする事もやと、おやふむ人のみおはかめれは、あかくいとてゆかんとそはいふにまさらめとて、またしきかきり一人ふたりにかりてせんひそかに出たつ、時をかんな月廿日まりみかの日なり、目白森なる愛松軒をわかれ出るはと、おもふ事多し

立出るわか袖たよもまらぬかなこゝろのうちに落るなみたは

臺の方を見やるに、とる、冬かれたるさままつ身にしむ

まのしとも人はとめぬかとてをの尾花をかりそ打招きける

随ひゆく人の菅名みさを、石田のうひて也けり、愛松軒のあるしなる見山のうしけ、越

の國なる柳下さよたけも、さるへき所まで送りせんとしてとまにきたれり、さてさよたけ

かよめる

終夜ふりし時雨と晴にけりされども今朝の袖はかわかそ

赤城の宮のわたりにて、のりしけ

牛こめのあかきの杜の紅葉のちるを日ごとに數へてまたん

かへる原といふ所をすく

春やかてかへる原なる柳かけこゝろのうちふすひてそ行

こよひのまつ品川ふやとり、菅沼あやを朝岡やすたふ、木村としき、本多これとさら、待

うけて馬のそむけす、こゝろさしあるにふたり、さてみさをかうたひ出せるうた

別れをもわする、のかりわれ酔ぬさめぬうちにもかへりませ君

やすたふかめよる

かりそめのわかれなれとも今のとてかへる心のかげらさうけり

としき

新玉の年をこえても鴈かねのかへりこん日をまちや渡らん

廿四日、あやをのりしけさよたけのみたり、よへもどまりてわかれをしみあかし、
けふも猶おくりて、江戸のかた海こしに霞みこめたり

まこゝも芝の浦なみかへり見てたちまをれぬる品川のさこ

ゆくゝのりしけいへゆく、事をへ給ひなんに、春はひと日も早くかへりませ、今
は世の中もそしりつかれて口すくや成けん、あまかまどうたてかりしさへつりも、やう
やく静まり侍りて、まふねさねたみ草もかれやうに成ゆきて、思ふぬわたりさへうこま
たち侍る、なかく時またせて、いとたゆらにまこの道の、おこりくるささしにそ侍
るめる、従ひまなふともからはさらなり、世中のたまもの侍り

我ねかふかひたにあら、來ん春はいかなる花か世にと咲らん

など、おのか方さまにいひなすめり、けにや昔より天の下に、道一すちおこすたくひと、
せかいの上に打むかひてたてるに侍れ、もとよりこなたにまたしむ人なく、おはやけ
の心ありて、我世の後をも見とはすまなこなからん限り、かへりてのろのしうわたみ
ねたむ事、おはよそとわりのまへて、それかわさのひにかりて、はのはをわけやい

こそわたるも、やかて此大道をふむにて侍り、こゝしき巖もたさる水には、推たよひ
されて打もまるふゆり、さりととも波とくもにくたけされは、つひにとまる所にてり
て、千とせの苦みとり深し、かのさかんなりし水のいきはひ、此時いつくにかある、いと
んや新桑のらどうつりてて、流れの跡たに知人なし、されと後を思ふ人今のまとし
きを歎んやの、すこし世ふまたかふ心をつかひ侍らんにと、いけるかさりの世中をかた
ふけん事、何事か侍らん、只世の末にと、めん跡の、あやまち多からんこそ、心くる
しくも恥かりしくも侍へけれ、こは必しも我上をいふにのわらす、玉の碎きてひさくも
のには侍らざる、とわりを申すに侍り、をこにさき、玉ひろなとかたりなくさむ、さ
て海晏寺に入て紅葉みる、盛の過にたれど、世に名高きかけおしなへならず、庭より
岡をかけてそめ盡したるに、雲間もる日影のさしわたるや、都なる通天橋の秋にも
いくらおとらさうけり、のりしけ

紅葉を見るにつけてもかなしきは心の色に出ぬなりけり

かへしのこゝろを

言の葉に匂ふまとの深けれはから紅もいろなかりけり

また岡の上にくくりのはりて

紅のふかき落葉をふみわけてふしの高嶺の雪をみるかぢ

くたりくれは池あり、みさを

池水にうつる紅葉の影みれの玉藻をつゝむふしきなりけり

のりひて

かもしろく聲鳴ませて色々の紅葉の中をさふ小鳥かな

寺を出て涙橋をわたる、おなし人

旅人の別れを惜むあみた橋ひと日もかけてぬれぬ日やなき

大森の會津屋へ入て、又さけくみつくして、今をまどにわかれなんとす、あやを

梓弓はるのかすみを引つれてかへりこん日をいまよりそまつ

のりひて

おもひやる思ふとちなる君ひとり残るはいかにわひしかるらん

みさを

品川の海苔をるいそにさしわたす日におもひん君かうへかな

さしたる杭の名を、里人のひいといふなり、此のやをの都よりつれくたうたる中の、ひ
とりにしわれは、これひの旅にもともなふへきを、おのれかへりくるまてのかかりにと
て、残しおきけるなり、されのみなかくとさら思ふ也けり、のうしけ

大森の浦にあそへる鴨すらもねもふ心に身をのまかせつ

此まゝにまたかひ侍らひなとかこつめり、さて新田の宮ふとこゝろさしたるも、日たけ
たれいえまうてす、六郷のわたしをわたり、川崎より市場鶴見を過て生麥にかゝる

あこれなりなまむき村も冬かれて蕎麥のから打から棹の聲

何事にかあらん、ある家に老たる女どもの、つとひて酒のみしけるか、とやり小歌かた
なりにうたひあされて、たなうらかたみにうちかはし、あひたひるゝを見てよめる

世のうさやわすれとつらんさゝの葉のさやけり是も一ふしにして

また熊をかひおける茶店あり、此くま春は芹をのみくひたるか、今は柿をのみくひけ

り、さはいへ投やりて、塵をどけかれたるをのさらにくらひす、されはたれも手つから
やるに、其やるとにかならずおしいたゝきてくふめり、さてあるしかたらく、此熊と腹
こもりにてえたるに侍り、今は十歳になり侍りぬ、親くまの腹をさかはきにせし時、そ
の利鎌のさき、かれか月の輪ふかゝり侍りて、はとく命あやうく侍りき、其疵いまだ
侍り、それ見せまゐらせよといへと、打すわりてのけさまに、のんとをさゝけたるさま、
あこれにかあし

月の輪にかゝれるあをを仰きてもみするやくまとなのるなるらん

さてゆけは海つら也、みさを

賤かすむ磯への家とあいらにて門よりうらの海を見るかな

新宿をすき入川村をくるに、行人まれにありて、日影な、ゆにさしわたる

尾花ちる松原こしの山のとにいさよひわへす入日かけかき

いつくよりか鐘の聲す

今やかくひいさわたらんきいなれし淺草寺のいり相のかね

のりひて

夕まくれおなし旅路の行かひにわれをも人のあこれとやみん
くれとて、神奈川の驛につく

廿五日、例のおそくたつ、程か谷をへて、權太坂といふをのはれは堀木といふ、谷の上に
さしかけたるさしき、けしきよし

色深き谷のもみちのあひたよりみどりに見ゆる金澤のやま
是より坂路にかゝりつゝ、いひもてくれは歌のやうなり

いざしより相摸おかゝるさかひ木のさとおりくれの信濃坂なり
くたりとつれはいとひろく、うちわたしたる野山面まろし

紅葉の色よりいろの深さかなところ／＼のまつのむらたち
柏尾をへて戸塚の驛をすく、松原日くれたり、みさを

あこれにもけふの命をまつかねに鳴のこりたるさき／＼すかき
廿六日、藤澤をたつ、空くもれり、まどらくきてよつやの里にやすむ

朝たちてとへはよつやとこたへけりみしかき冬の日影なるかな

海のいたくなりひしく、雨おなるにやどいへと、よねひる女ともいふ、かみの方よて
なる時は日よりに待り、下の方にてなるとき、雨ふり待り、さらけ今なる聲、たゝ向
ひの沖中にきこゆめり、いかゞと皆いふ

てりくもりまくる、頃の海なりは中空にして定めなきかな
ひさち村をすく

かへりこん春やひさちの小松原今ひとしほの色そへてまて
ある家のまへに、白き花の咲みちたるを見れば、ひらさなりけり、のりひて折てかさ

す、その匂ひたかき事梅にまされり
終とまはしちちりそ花ながら今こん春の門にさすへく

みさを
いえ鳥のともよひさそふ聲すなり梯さしたる賤か軒端に

茅か崎より南郷へ出るに、わかき琵琶はらしの人にひきたすけられて、かどく／＼に立て

うたふをきけと、大老らへの神はきに、ふもんはんをよみましへて、ひきならせめり、聲はあこれにてさすかになし

四の緒のしらへあやなき聲にさへそらくとこそ涙おちけれ
濱の郷より大山をのそむ、のりひて

時しもあれ濱かせわたるわし原のふしてそ拜む大山の神

道のへにそひあまりたる山まつのねよりもまけく物をこそ思へ

相摸川のわたり近つく所にて、笠ぬきあへそそしりくる人あり、たそやと見れと都なる、波多野ちかとも也けり、このくよと立よりて

見るからにうれしと思へ、悲しくてかなしと思へ嬉しかりけり

さきのたよりに、おのれをむかへに出たてりとなんきつれば、おもひかけさるにあらねと、さすかに心さどひて

おもふ人ありやなしやをどふ外はまた打出んとの葉もなし

まつ程ちかき、平塚のさどへともあひて、ひるけたうひ酒くまんとするほどに、まかく

の事かたりみきりみ時うつりぬ、都の文とも多かめれと、とてもかくても此ちかともにつきて、のへりのはれとあける事の、外なんなかりき、さるほどにちかともいふ、おのれ都を出たつとき、栗田口なる松坂のさとまで、送りこし人々の弓屋か亭にて、馬のとなむけせり、其ときおのくよめりし也とて、とり出て見するなかに 三宅もとけふ

神なつき小春のけふの朝霞たち別れにし二月の空もそゝろにあつかしく思ふ

心は大比叡の峯よりつゝ岩倉の山のいねと我のみかなへてもこふる其中に君かのこせし岡崎の宿の二木の姫まつのみつけしきはよそに見て忍これ

ましや白雪の降つもるらん冬もすき春にもならぬ海ちかみあらし吾端の潮か

せりや吹ききて咲花のさかりを見んと墨田河すむ心にも來んとすらん
いひあせ思ひあひせて栗田山まつのみ也と君につけなん

白波のかへるときかは打出の濱まつかけにまちや渡らん 山本まけのふ

かへりこぬ君なひくまであたらなん都の友の心つくしを 多田あきさら

別るゝも嬉しかりけり君を今ともなひかへる旅そと思へい 松岡もとあつ

此外もかすくわめれど、おのかうへよわつからざるをはのこせり、さてその歌といかにといへど、ちかどもこたへて、口のおそきに行道のぞく侍れり、何のひまに打も出侍らん、すこし書つけ見たるをさへ落し侍り、されど關をこえけるあした

鈴鹿山木の上にふりたててもおとさやかなる玉われかな

また龜山のわたりにて

おのつから跡を惜むお似たるかな踏うかりけるけふの初ゆき

これのみつらき方にておほえ侍り、外をわすれにたりといふ、さて夜たかたらふうちに、山田直躬なほみもさきつ日身まかりたり、といふをきいて

思ひきやあし荊小舟さのりきて後の世までを隔つへしとは

此なほみの廿年ちかきむかしより、ものまなひに來りて、いとむつまじかりしを、をとつとしの秋にやあらん、道にそむける事ありて、其後うとかりしや、にて、かくとかなくなれりときけと、いやとかなふも成まさりて、涙とめかたし、けふのくれぬほどより南の風ふきすすひて、あたけきものからさわかしさこちす、物かたつけていねんとする時、みさを

とする時、みさを

其ころあすのまてまし此みなみふきかへしな雨になるてふ

廿七日、平塚のやとりをたつ、さてちかどもをば一たひ江戸へつかをすとありてこゝよりわかれぬ、高麗寺山の紅葉いまさかり也、まことに寺の名におふ、こま錦をれらんやうにて、たくひなきを見つゝ櫻川をわたる

かゝる此紅葉にそめし心よりたれ花みすの橋といひけむ

弓手の方にもろこしか原、くるくゝと見わたされたる、時しもまくれの雨俄に降きたりて、木葉空にとふ、みさを

大いその荒なみたかく打そへて松かけすすふ唐土のはら

國府津を過て、袖か浦にいづ

龍田姫かたみの袖かうらならしゆるきの磯に残るもみち葉

とまでをくれのかうくしきみやしろあり、高かつらとひわたたりて色つけり、さるほどに又しくれんとす

よる波に打かへさるゝくすの葉のうら風とやみ時雨きにけり

白妙の眞砂の上にもふ葛のうらさやかよも見そなむせ神

梅澤なる釜島屋に入て、例の酒くむ、春こし時之此隣なる、松屋の庭の花をめて、ひねもす遊ひくらしき今あやをの吾妻に残り、河野まけ^{重就}ありのみやこかへりて、けふのみさをのみそろの敷なりける

春見つる友のいつらと花の木も紅葉の色も出てこふらん

さてゆく道のまりへにおくれて、うたひあくる聲するの、みさをにやのりひてにや

天地のわか身ひとつのこちせるこの酔こゝろ常にもわらなん

前川のはどり、ことし子とまほしき、荒駒二匹引立て行すく、いつちよりとへと、明高山の御牧おてとつなけりとこたふ、そのさやあこれけ也

あそへのみひかる、駒のあしたかの山ふところやこひしかるらん

酒匂川をわたる、雨はいみしうふり出て、やとるべき小田原の里も、霧のそこに暮なんとす、河原の道たとくしきや

さかの河色こき茅原をしけれ石の上よりふみかたきかな

廿八日、よへよりふる雨、さらにやむへうも見えさめれと、晝すくるまでいよひぬ、さて晴ぬれば、管根の湯本までとこもひたつ、やかて山口にかゝれり、象鼻庵のかたのなる巖の上に、楓二もとたてりたるか、ぬれながら夕日にてりて、さなから花染のさぬに似たり

今染てまはりわけつる紅の千入のきぬをたれかほしたる

紅のこそめのきぬの管根山まつ一かさねとり出にけり

風祭のさどをすく

風まつりのるかひあるとに逢てたり穂こさおろしうたふ聲する

右の方にいと長く、打なたりたる松山と、そのかみ小田原陣のとき、豊太閤の居城にして石垣山といふ、思ひ出る事ねはさわたたりなり、のりひて

武士の常磐とみけん松かえにたえく、残る夕日影かな

湯本なる福住か家にやとる、出湯をの家のうちにかこみ入て、湯けたたゆたにたへ

たる、いと清くすぎきとほりて、心のおかも洗ひ落しつゝし

うへもけに神のわかせし湯なりけり千とせになれとぬるみたにせす
ちかともかへりきたらんまてり、こゝにありて湯のみまんとす

廿九日、ものなひしきまゝに、あつまをおもふといふころを、よまんとてよむ

浦島かはこねあらねと別れつるそなたこひしき明方の空

みさを

おもひやる羽くゝみすてしかきし子やひとりとねくらの鳥越の里

また都を思ふといふ事をも、よみまんとやといふほとに、おのれは事ありてえよます、の
りひて

夜をさむみ今や都の鴨河にさくらん千鳥ねもひこそやれ

みさを

栗田山君をまつより落そひてわれにも露のかくれと思ふ

十一月朔日、けふも例のゆあみてくらす、夢といふ題を出せれど、おのれと又えよます、

みさを

行末の夢にも見ゆるものならこいかにこかなき我世ならまし

のりひて

わかおもふまゝなる夢もみえまゝんそれにてに世をなくさめてまし

二日、此家に朝夕來ならせるさすり法師、たんざく一ひらとりて、此ゆふへ南おもて
にやとりける旅人の、おのれおたひたる也とて、見するを見れば、鹿といふ題にて 鴨
しかの心のはとはまらねともわか身をつめいあそれありけり、とかい付たり、時にふれ
てあそれならずしもあらねと、おのれさへ身をつみて

秋にしてなきやむ鹿のつまこひの數にもあらぬ思ひなりけり

こよひしも打まどひて、詩の事をかたりかゝすに、此古句や今の旅の心になへり、な
といひまろふ中に、鶏聲茅店月といふをよめる

道のへの萱ふき白く月をえて内にきこゆる鳥の聲かき

のりひて

鳥のきくくつやかうへにてる月の影はのくとしらみけるかな
また人跡板橋霜を

わき出るゆもどにかゝるいた橋の上にも深き霜のいろかな
こは人跡のこゝろなしと難す、けにや實景にとられて、題のねもてをわすれたりな、さ
らはとてまたよむも歌かり

板石しの霜にあそこそのこりけられたれ夜深くも獨たちけん
のりひて

橋の上の霜ふく風を身にしめて、行けん人の跡を見えける
三日、けふもかのつれくゝなるに、湯のわき出る岩間をど見あるきて、みさを

火く出見の神しつめまを山なればうへも泉の湯どりわくらん
山の色もおそろへ行く、わひしきころ也

とこね山出湯にうつる紅葉の色はとやくもさめにけるかき
みさをいとく、此とこね山のうちにてすくれたるところくゝを、題にて歌よまんといか

は、かきつめてこゝろみんとて、とりわへす書出せる、八勝の題をおのくよむ、おのか
のみこゝにはしるす

雙嶺飛雲

二子山雲の産衣かけてけりたれ大そらに生したつらん

關門早鷄

君か代をひらくとこねの關なれハ木綿付どりの聲も長閑し

遠島驟雨

沖つ波打しくるらん伊豆の海や天城か島を雲かくれ行

山池温泉

暖かにいつもかすめる山かけの湯本の春や常磐なるらん

晴湖落月

影みればふしのねなから蘆の海の底にかたふく有明の月

古寨斜照

山よせの城門のいし垣わつかにも残る夕日の影そさしたる

石 濚 亂 流

水上はしのひの瀧もみたれつゝ岩ねおかゝるおとのさやけさ

神 壇 老 樹

神かきの老木の松はここね山ふたゝひ千世に逢にけるかな

こは函嶺八景として、此家にも書のかせり、又みん人たゝすへし、けふの風いと寒し、雪もふれりといふ

旅ころも時雨にぬらしくきて積れば雪もふる日数かな

雨になりて水の聲とさらゝ高く、夜半の鐘の聲、木からし吹すさふをりくゝいととるかにさこゆるは、いつくのいかなる寺にかゝるらん

はこね山そことかとなくなる鐘の二聲三聲さこえけるかな

岩かねをやかても結ふこゝちして枕うこかすなみのおとかな

いてや光行の道の記にも、湯本といふ所にとまりぬれり、みやまかろしとけしく打しく

れて、谷川みなきりまさり、岩瀬の波高くむせふ、とかきたる遠さむかしも、打つけにおもひ出られて、其入さへそこひしき、また方丈記に、行水のなかれと絶すしてまかもその水にあらず、といへるもさるものから、いまさくねさめの聲のみ、なほ其時にかとるとわらしかし

岩はすらなかくれたれと早川のひくさはもとの姿なりけり

此ゆもと川の末を早川といふ

四目、けふも例のはうし來たりて、此わたり何くれの事ともかしましう、ととすかたりするとしにいとく、土鼠といふやつり、よに恐ろしさものにて侍り、此とて根あるさいかち坂のあたり、限りもさく生しけりたる、竹の根をくひ盡して、とくくからし侍ぬ、と云に、ふと月日の鼠おはえて

たとへとも何思ひけんくれ竹の千世の根をさへとむねすみ哉

さて暮んとするほどに、江戸よりちかともかへりきたれり、のりしけかねとせし文のおくに歌あり

たちかへりねなし跡のみふむ時のゆけとかひなし式島の道

別れまゐらせての、とかけり、またけふしもいつもの守ま^正たか^高かかもとよりも文ありて

春篋たち別れにし朝よりおはるに成ぬしき島の道

となん書をへたる、東も都もかへらぬ道のたとり也けり、花その、君よりも御せうそこ
給へり、いたり深さくまゝまで、ねんころにおはしおこし給へるなん、いとかたしけ
なき、都をたちし時、我にのみかされりとしも思ふかなたれも別れとおしむへけれど、
どのたまへりしも今さら思ひまゐりぬ、又はと近くおこなとれん、とつ御代の大なめまつ
り巳日の節會に、うたひるへき催馬樂のうちには、絶てひさしき装山をおこされて、やか
てき^公なる朝臣も、ひのやくつかうまつり玉ふめりかし、かの詞曲のうへに尋ねた
させ玉ふへき事ありて、かくとるくふりのへさせ給へりしを、いつくの關にかさひり
けん、今日まで日數おくれにたらんに、御かへりまうさんも中となりや、かゝるめて
たき今年しも、都を遠くとなれぬて、世中ゆすりとりくらん、大みまらひのひくさを
さへ、えさき奉らぬ身に、あふか樂しさをうたひわけ玉ふらん、あまつ雲井をさへに、

かしくも忍ひたてまつりやりて

みの山の雪の下なる玉かしの御世のひかりにあひにけるかな

實章卿

故三位入道のきみ世におこせし時、何くれまうしたいまつりし中にも、此さいとらの聞
まじりかたきふしくをとき正して、おはやけの爲にも奇しおきて給んみはかりも、より
よりうけ給ひり思ひめくらせしほとに、身つからさへ世にむなしうならせ給ひしこそ、
いととかなくあたらしきわさなれ、かうやうの文とも夜ふくるまで打なかめよみかへ
すほとに、旅宿の燈といふ心をおのくよめりけん、のりひて

燈の影もあそれれもふらん夜たいいそねぬ旅のこゝろを

みさを

あひれなる旅ねの宿の燈はみるゆめよりもきえやすきかな

ちのとも

ともし火の細き光をかへけてもねられぬものかわれ旅にして

五日、あすの立なんどおもふに、さすかいらかひしきこゝちして、けふの歌もよますと

かくして夜もふけぬ

六日、たつ過る頃出んとす、宿の人々別れをしむめり、今こん春を契りてたつ、さておしまつきのとしに書すてたる歌

あまりにも日數かさねて旅衣たちうきまてに成にけるかな

うへの大路にめぐり出て、谷陰をかへり見れば、やどりつる湯本のさど川つらに見えて、どかくたてたる家々のむねより、烟寺と立なひく、あれやかの家寺といふふ、あこりすくなからず、みさをちかどもの、暫し立おくれけるか、はともなく道のほりさぬ、木立のまされにえも見定め侍らさうしなといひて、みさを

紅葉をたをりもたせてみやひをのゆくのをよそに思ひける哉

袖たれて木の間長閑にあゆみ行君かよそひの旅としもなき

すくも川の上る山に、絶く見ゆるは忍ひの籠きり、かたへに紅葉たてり
くれなるの色の千入に木かくれてまのひの瀧のかひやなからん

たのれ酒に酔るを、かこにさへふられてこくちくるしけれ、烟の里なる蔦屋といふに

入て、暫くいこふ、打ふせる枕かみに、山風ふきおちてそころにさむし、まどやおどつひの暮つかた、二子のおくなる何かしの嶽に、雪いと白うふれりとなんいひし

ひるたにも寒きたひねに赤たの二子の山を思ひこそやれ

けふの日は大かたくもりかちにて、をりくしくるめり、みさを

哀みをいつらとわけて二子山わたくし雨はかゝるなるらむ

これよりいよにけはしき坂路にて、のはる人くたる人、かたみにあへきかえす

菅根路のあしの木坂にさるすへりのほりかねても音をそなきける

みさを

岩かねにわらつ踏さるあなうらのあなうといとぬ人なかりけり

うしろには、相摸の海をるかにうちひらけて、かの紅葉のせとみし高麗寺山も、汀の波に立ましれり

ここね山わか越かねてこゆるきの磯のしら波かへり見しとや

たうけにくれと富士のね、ましろにそあらいれたる、かの駒かたけのいたくきにも、星

のかりきえ残り、管根権現の宮やまうつ、物ふりていと木深く、關東總鎮守の額たかくかりて、湖水よのそめるさまなど、いにしへのさこりあるに似たり、此わたりすへて杉のみにして松をなし、ゆもとよて物せし歌に、神かきの老木のまつとよみたるは、いたさあやまちなりけり、と悔るにかひなし、幣たむけ奉りてみさを

神やしる君にこそねの二心なしとちかひしわかむかしをば

こはそのかみ公につかへし頃、此大神の御名をしも、ちかひ文にたひくけかしまぬらせし事を、おもひ出たる也、さて關をこゆるにかの紅葉かさせるを見て、ちかとも

この葉の道に手折し一枝と關もる人もとかめさうけり

猶こいなやましけれと、やかてたうけなる破風屋にやとる

七日、この家は、かさねに湖水の波をたへ、軒端に富士の雪をつみて、またなきけしきなれば、春のたひにもやとりける也、その時よみつる歌の中に、ねもひきやふしを枕のもとに見て管根の雲に一夜ねんとは、といへるありしを、みやこ人のさへ傳へて評すらく、吾嬬の旅をせんには、こそねにねんともおもひかけざるあらず、いとんや西行の、

おもひきやふしの高ねに一夜寐て、云々の歌を其まゝかすめとれるなりなと、わらこれにたりとさへつれと、古詩に古歌に似てにてん、物めてするえせ心に、猶おもひかけぬこゝちして、こりすも此あした

またさらに夢かそおもふ此ねぬる枕の上にみゆるふしのね

箱根こえふたいひみたひ見れとくみぬものよりのめつらしき哉

みさを

きても見よふしを枕のもとよりも外にいふへきとの葉のさし

是よりささねさめしたるに、庭鳥の聲まよへきこゆ

そらとはとかりもしらぬ君か代の關路まさしき鳥の聲かな

鳥の音のはのかなりつる關の戸の杉の木間にあらとれにけり

こは明るをまちておき出るに、關屋の戸ひら、塔の島根の朝さうにつらなりて、此垣こしに見ゆれば也、みさを

ひらけたる關のひかしの國原の敷を八聲ふうたふ鳥かき

いともをしけれど、かきりわれは立いつ、おきし人

夜をこめてたれかたちけん松の火のこはれし跡を霜に見えける

むるふ坂より風こしにかゝる、おきし人

かさこしのまの、かや原ふみわけてさやかにみつるふしのしら雪

さて行はどに、やことなき女とら一むれあへり、かのかまゝ小妻とりもあへず、振袖ひすひなから、岩根ふみさけまところにも、みたれくるものか

風こしの坂の行むひに散かゝる一むら紅葉色のこさかな

尾後侯

ものにも似すさりあへかたし、かたとらよとへは、こは筑紫路なる國のかみのみむすめ、吾嬬の御館にくたり給ふ也といふ、石とら坂にかりくれば、伊豆の海原見えぬたる、鎌くらのまうち君の、沖の小島に波のよる見ゆ、とよみ給へりしはいつこあるらん、たれた天城の大島のみそ、遙かに打むかひたる、むかしの古道より、さる小島もやみえつらん

伊豆の海や沖に小島の見えぬともよりけん波そおもかけにたつ

大枯木にくれと、駿河の海もひとつに見えて、薩埵山まゆのとし

海原の雲のかくれの一むらのとなれ小しまやみほのまつとら

猶くたりて富士見たひらにかゝる、けに名もしるく、雪のすかたのこりなくあらとれて、磨き出せる玉に似たり、寶永山こなたさまにむかへるを、みさを仰きみて、此班や千古の恨、とひとりこつをさゝてよめる

天の下ふたつたにきき白玉のかけたる敷きたれかせさらん

上長坂にやすらふ、此岡の西のかた、十歩のかりさし出て見るに、南北ひとつになりて打ひらきたり、おきつ波こなたの嶺にかへり、目のまへの松の高ねの雪ふそひえたるなと、名たゝるかきりはいふもさら也、數ならぬ谷のとなさま岡のつらまで、けしきさら尋常奇らず、そこねちの眺望の此所を第一とすへきよやあらん、山中の里とささの月の末つかた、残らすやけうせて、春みつるなこりもなし、板もてかこへる家ところくものうるめり

山中の松の常磐も大かれ木小枯木とこそなり果にけれ

さへ原より、小時雨大しくれをくたりて、松原をひたりにのほりゆけは、初音か原なり、かきりおもしろき所なれとも、人ねはく立よらす

引うゑしいつの初子か原ならん千世おもあまるまつのかけかな

春遠みまた冬こもる鶯のとつねか原はえる人もなし

それよりなぐめにゆきて、今井坂の上なる、愛宕の神のうしろにいつ、もりの木立にたちまじりて、紅葉いまた残り、おほろある夕日さしなひきてものすこし、麓の方にや

賤の女か夜寒のころもおる機ノ聲の外には音なかりけり

さてつひにくたりて、三島の社にまうつ、いとひろき御かきの内、見奉りめくるをりしも

散かゝるいてふの一葉袖にうけてやかてもぬさを手むけまつらん

おのかものなるをどのたまうへし、こゝの森もこのはどりとおもふに、よるにそきゝすてかたき

ひとの親のこゝの杜の木からしり身をわけて吹こゝち社すれ

そとろさむく、日もくれんとすれいと、まりぬ、此さどに三島磨とて、世に名高くもせは、となるふしもやあらんすらんと、かひもどめて見るふ、たゝとちの冊子にて、そのさまのみそかりれる、やかて來ん春の事はしめなど見ゆるも、中ゝこゝろはそさこちちして

はかきしや五十あまりの年月も夢とみしまのこよみなりけり

八日、よへより風さむくふさおこりて、今朝もやます、雨にやならん雪にやきといひののしるほど、すこしおこみぬれば、まつ降こん所までとていてたつ

降くともしらてふみわたる石としの上に見えたる雨のあとかな

すいやとていそくに、また風さへくとりて、いやふりに降まけの道さへ見えわがす、此わたりいつくとへと、伏見を過て黄瀬川なりといふ

常きらのあつかしからんさとの名もうさふしみあるけふの旅かな

かせたちてみそれになりぬ養かさもたれさせ川にえる人となし

みやを

とてもやむ空にしあらずの玉辭の道なる妙に雪もふらなん
からうして沼津の宿に入ぬ

玉はこのみちもぬまつと成にけりふみふむ上に葉ふりつゝ
車かへしのさとも、此わたりにやとおはえて

小車もかゝるとききにやかへしけん道の空よりふるみそれかき

けふはとてとゞまる、あまりに道とかどろすなとつふやくめり、今宵のあるしはこゝろ
きいて、よしめさたる酒さかなてうし出せり、をりしも此さとの騒音なるもの、となり
の間にきつとひて、まひ歌ひけるか、ひとり其中に、むさし野のゆかりゆかしくやきゝ
とりけん、やをらとひ入て、みさかつきなとけさうひたり、こきむらさきさらぬ淺草の
一もとゆゑに、みなからたゝならずおもひまゐらせ侍りてそ、ゆとれと見給へてなん、
こゝろの外さるすくせ侍りて關のこなたのうら波に、かくまはしみ侍るものから、引な
らひぬる糸筋の、あつすを何をと、かなたこなたにかけ侍るも、玉の緒のみたりこゝろ
になど、かたりもをへすまらへあけたり、かの何かしか薄陽にて聞つらん、四のそなた

めしもひき出へきこよひのさまかき、さりやあをれいかにさきくに、たゝとり出てさけ
ふのみそ、帛を裂の聲なりける、さてこよひとの外にさむし、のりひて

ふしのねの嶺の白雪こよひしもすそ野をかけて降おろすらん

九日、けふもくもりたれときふに似す、千本松を過て見わたすに、かの高根といふ
もさら也、さらぬみねくも、残る色さく降みてり

たれしかも空にわくらんふしのねの上にふりそふ今朝のしら雪

ある所おて、さけくみなからゆされよめる、みさを

ふしのねの裾わけならしあしからも箱根も雪をいたゝきにけり

諏訪松長をすきて原にゐる

不二のねを木の間くにかへりみて松の陰ふむうき島から

裾野のかたに、鷹の一むら飛行を、のりひて

今はたゝ浮島かゝらとふ鷹の翅の外にまら波もなし

むかしの此めぐり、海原なりしといふをよめる也、今はなこりばかりの大澤、ふもとの

東南にあり、さと人のこれをさして、浮島か原とよふ、大路より、二町とかりへたてたるを、立とたりて見るに、棹さす小舟の、とるかに打わたるなといと面白し、ちかとも

見渡せばあしかり小舟こく水にふしの高ねもうち島かひら

けふみる富士のけしきをいとんふ、すへてのくもり日なれど、中々あさやかふ見えわたれるか、やうくいたきひく雲の、つひにうつみ果て、わづかに麓をのこせり、ひつしの頃よりまたたえくくに、かつ見えかつかくれて、木間もりくる月よりも、心盡しの空也、みさを

白雲のいまはとおもひ絶間より又あふりれてみゆるふしのね

箱ねちのよへのゆき、四尺とかりふりつみて、跡たえたりと行人かたる、けに今日もくもふかし

鳥の音にひらく關路とおもひしり雪のとさしを知らぬ也けり

かしこうも早くそ出にける、令一日とまりなと、雪の底にそきえんすらん、さて鈴川をわたりにて豫田橋を出れば、立そろひたる松原のうへに、引すゑたらんやうにむかへる

姿、又さらになくひなし、夕雲あし高の嶺を埋みてや、暮なんどす

踏いてし足高山のあしたよりゆふへになれとふもどをそ行

からすの打鳴てみたれ行を

まてまとしとまりからすよわか宿も其まつ陰のよし原のさと

こよひ野口か家にやとる、すき間の風ひえわたりにて、よた、夢もむすとす

はたへすら氷るのかりに寒き夜をおもへとふしの麓なりけり

十日、朝またきよりみそれふりすさひ、風之けしけれとけふもこのやどにをり、終日うつみ火に埋れて身まろさもせず、軒端ある楓のなかのもみちたるか、いとうるとしきをひまより見て

雪よりもおろす時雨や染つらん紅葉も時をしらぬ色かな

十一日、よし原をいつ、河原宿よりかへり見れど、ふしのねくもりあし、すへて山足東西にふみひらき、打靡きたる裾野まで、端山まげ山さのりきく、のこるくまなく見えわたれるは、此わたりにより中の郷までの間なるへし、さてうるひ川蓼原をくるやど、又立か

くしたり

大かたは雪と雲とに埋れぬあまりに高さふしの山かな

人もかくこそあらめ、吹上にくれば田子の浦見えわたる、坂中の榜木に、今朝散し甲斐の落葉や田子のうら、といへるをせをか句を書付たり、その落葉とも見るのかり、數の釣舟散みたれたる、いそん方なし、蒲原を過て由比にとまる、さて此家の庭さきなる、汀の松などよくくみれば、くたりつるとき、あまり磯さの波さわかしてやとりあへず、立出しやと世、さるはかたはらいたくおもてふせなるこちすれど、かれのえ見しらす

契をやゆひの濱まつかへりきて立よる蔭のなみを見るかな

はたしてこよひねられぬり、ひるみれどもかぬ田子の浦といひし、古人の心をも思ひ出られて、やをら起出てみるに、月といつくよりさすらん、波の上どころくおほるに白く、見なれぬけしきもめつらしきものから、いとすこまこちすれと引たて、入ぬ、いよく目もわとす

あらためていかに枕をゆひの濱春より高さ浪のおどかな

十二日、朝とく出て由比川をわたる、寺尾の松原をすきて薩埵山にかゝる、伊豆の海とるかに、日影匂ひわたれり、ゆん手の方をみれといそ山陰の上より

さやかにもあらぬ初し富士のねにさしむかひたる朝つく日哉

れのれ麓をのそみていとく、關のむかしもなつかしきに、いさかの見ゆる磯邊におりて、岩根つたひのふる道を行んといかに、荷おへるおのこかいとく、さらはあとなるくら澤よりこそおろ給ふへけれ、目の下に社見え侍れ、このたうけよりくたる事はいとかたかなるわさおて、もとよりさる道も侍らす、よしやかり立給ふとも、親しむすのあたりに、此やとくえ入侍りて、つたひ行事いとらしく侍りなん、おのれいとく、さてこそは關もる波のかひとありけれ、いさやまつ分ころみんとて、荷などもせさせて、のりひてをはさきへ遣し、みさをちかとも二人をひきゐて、たうちふみくたる、小まつ高かや限りもなくえけりきたりて、さらにみちなきものから、けとしくもけのしければ、さるしけみにさのりつとも、ひとりをとへり行、手もかづもかささきて、いとたへかた

き中にうめき出たる

岩木山まよへるかつらとりすのりくるしき目にもかゝるふしのね
又とりたるちから草の、さとかをれるをみれと藤袴なり

ふち袴たれぬきすてゝくたりけん我のみとおもふ山のとかけに

くたるまにく何にかあらん、針ある木のまもと原にして、わらゆるかつらとひまど
ひ、まからみかくる椋鹿の、むなわけするに似たり、みさを先にすゝみて、刀もてきり拂
ふ、もとよりふみし跡もなければ、れのかむきくくたりわかれて、をりくかたみに
よひかのすめり、其聲もきこえずなれ、もしふもとのかけちを踏おとして、波にも
やればれつらん、などおもひすくすに、いとおそろしまてなりぬれど、さてやまんやの
ど猶すゝみくたる麓より、みさをよひひてむけにけとしく侍れ、わづかふしてれりさ
る事、かなひ侍らすといふ聲、波とくもにひゝきたり、飛ねりんといかにく、いなやわ
つかといへど猶一二丈も侍るへし、太刀とさなからはきりめてわやまち侍らんといふ、
わあねたしや、何にかはきたりけん

磯きりにおり立かねて白波のかへるる田子のうらみなりける

さらりどてふみかへすも猶やすからず、今はわらくつの底もとくくぬけて、いとふみ
しめかたきをねんしつゝ、どひのはるに固めく所あり、みあそこにつとひふして、いさ
つきあへり、此日ころわかよむ歌を、さくのままに、かい付たりしを、今のさわかき落
しけん見えす成ぬとて、もすそのたをりまて拂ひさかして、みさを

をしきかき山邊海へによみためし敷もしら玉たれか拾ひん

あなねたしといへどかひなし、さてまみれたる血をふき、汗かきのこひわゆひ引しめ
て、やうくもとの道にあかりくれと、時午のさかりあり、わづかの、はりくたりに、
あたら時をも過しにけりな、いとおそのりしわさかな、のりひてやいかに待わひん、い
さといそさくたりて、興津川をわたりくれと、のりひてまぢうけて、やかてこゝなる茶
店へ入てひるけなとものす、南おもてうちひらけて、三保の松原まへにつふなり、いそ
の巖に鶴の翅はせるなど、わさとならすおもしろさわたりなり、庵崎のこぬみの濱とよ
めりしも此はとりあるへし、此家と春もやすみし所にて、をりふし彌生みかの潮干にあ

ひて、めかり貝ひろふなど、見めて、酒くみしも今のこゝちす

おきつ鳥鵜のゐるとかりのこりけり潮ひに見えしいその岩かね

かけたる一軸を見れり、誠拙たいとこの筆也、まどやこたひの世にまのふたちのいそぎに、かゝるわたりへり、なへていとまますさゝりし事の、暫しのほとなからいと心くるしきを、今こゝに微風吹幽松、と書れたる一くだりを見るにも、ひそかに心かかひりそなたの空になんまた普門りしもいかお思ひこし給ふらん

われを君まつと遙かにへたつれと吹こそかよへ三保の浦かせ

など獨こたる、けふはおもひかけさる薩埵の山ふみに、れのくつかれかうしたれば、またはやけれど江尻にやとる

十三日、つめて巴川をわたる、此川庵原有渡而郡のさかひといふ、暫しくれと神薙の神社へまうつる道あり、左の廣野にひとむらの森みゆ、其わたりいにしへの焼津なるへし
今もその大御つるさのたち風のかれふす草の色に見えけり

小吉田のとつれなる、長門鮮うる家にいこふ、此所のそのかみ梶原かけとき、二代將軍

のいかりをさけ、一宮より落のひきて、其子景すゑ景たからと共に、討死せしわたり也、打わたしたる野末に、芝山のもみちたるあり、里人梶こら山といふ、其うへの松むらに塚ありときくも、いとわちさなし、遙かにをかみやうて

山松のしるしはかりを残り置て幾世の霜の下朽けむ

此ぬしの、鎌倉景正ぬしのうま子のすちにて、わか遠つみおやとは、とらからのつらなるちなみよそならさめれり、かく一首の歌を手向るも、逆縁にはあらしかし、みさを

武士のよるひの袖のちしはより紅葉の色はそめ出にけむ

ふしのねのみかりの犬の末つひにあこれえもの、數に入けん

栗原長沼をへて府中にいたる、賤機山なる淺間の大神にまうつ、大御社いさ作りかけられて、いらかの敷そなとらすといへども、まつなりたてる宮居の莊嚴、いまた世に見ぬひかりなりけり、こはあつまつてる大神のうつし世におとせし時、みちかひありし御影にして、さはまつまつます下野のふたら山の結構にも、をさくおくれすといふゆり、さるみたまのふゆにあへるをかしこみ奉りて

此神をみたれたる世をたてぬきにおさめたまへり賤れたの山
安部川をわたる、この川かみに木枯の森ありといへど、行ても見す

いかふして蔭をはとらん音をかりきくたに寒し木からしの杜

駿河なる安部の川原の河こしの手こしのさとに我はきにけり

ふしのねをかへりみるまで歸りくる東の旅之日數へにけり

さとの子どものおそへるさまを見て、みさを

日數をやわれもかそへんうなの子かつくやまりこの里の夕くれ

やかて此さとなる桑名屋といふにやとる、あけんあしたの宇津の山こえにかへらんす
るに、窓うつ雨のおと絶間なくさこゆれば、あすの山路いかにいふせからんかと、おの
おのわふめり、曉にいたりて猶やます

夢さめてゆめかどそおもふうつつ山籠のさとに旅ねしてけり

十四日、たんとする時ふいたりて、あるし一ひらの願書めくものを出せり、ひらと見
れば、よへより御ふるまひ見奉りめくらすに、何かしと申御名のかりそめにて、まとは

香川の君にておのさうす、かしくもとかりまゝ侍りぬ、もしさらは一夜の御宿たてま
つりきこえしに、おのれかめいはくに侍り、今このこの道におきての天の下に獨たち、
きこえおどろかし給ふめるを、誰か聞えり侍らざらん、何ふても御歌一首かいてるし
たひ給のんには、なかくたからとし侍るへうなど、猶くたしう、文字のさまいとどか
たくなに書すゑたり、かたのらいたきものから、よへよりとなるあるしせしに、此いと
れありけりな、さきつ日沼津のあるしもかくそはいひし、事のついでになど、例の契り
おくめり、吐月峯を右に見て九子川を渡る、雨いみしうふれと、ふみすへりていとわや
ふし、所をとへの赤目か谷といへり、

鞠子よりかゝる山路のわかめかやあからめなせとさうひ落なむ

ゆくての谷を遙かに見やりて、みさを

畑あらずまゝをやうつの山かけに火繩手にまきたてるさつ人

のほり行まにく道たへかたし、かゝる山邊をこん春も、また立かへりこゆへしとは、
かねておもひさや、あすものせんさやの中山も、まことに哀也けり、世はさためなきもの

とおもふに、かれも又思ふことあらん、のりひて

はかなしや明日の夢と成ぬへきけふのうつゝの宇津の山こえ
と打なかめゆく

あまたひこゆる山へのさねかつらくるとかたかく何おもひけむ
こはのりひてかさねかつらを引て、たくりあへぬをみて思ひよせたるなり、十圍子うる
家にいこふ、そこなるたひら橋のはとりより、ふる道にゐるへきあどあり、ちかども

雨たにもふらすのやかて分いらんものなつかしき葛のはそみち

岡部をすぎ鬼島水森をへて、藤枝にたとりつく、あつち屋といふに入てものかひさけの
む、けふの道のわるきにうみつかれて、かつ醉にさへるへれば今のあゆみかたくて、や
どるとはなしにさながら此家に明しぬ

十五日、けさ空をれたり、瀬戸川をまたりてやかて瀬戸むらなり、女どもの染飯うるを
かひんとて、みさを

ねほつかなたれをか思ひそめいひのいとぬ色にもみゆるあるかき

右の方に烏帽子山といふありて、そのかたちいどよくえはしに似たりといふに、しらて
過ぬるをくゆ、遙かにきてのち、山のうしろよりふとさし出たり

おもはえず見こそかひせれえはし山たそとやなれもふりかへりけん

水の江を過て椋山川をわたる、身を捨てこそうかふ瀬とわれといふ歌の心も、思ひ出ら
るゝ川の名也、さて島田にきて大井川を渡る、れん臺とかいふものにのせて、人あまた
してかき出たるに、うしろさまにのりたれの富士まむかひにみゆ

白雪の上になくよふふしのねのわか浮しつみむかふなりけり

金谷のたうけにくればいよくあらわれ、又さらに類ひきし、北つらに、むら白き、
飛弾の國の山なりといふ

しら雪のおろしをうけてふしのねのひたりにたてるひたのとは山

横の原を過て、くたりとつれば菊川なり、宿西岸而失命とかいれし承久のいにしへ、お
なしなかれお身をやまつめんとよまれたる元徳のむかし、かれといひこれといひ、思ひ
やるたにとりくかきしからすやの、こゝろあらんたれか袖をしほらさらん

東路ありとまゝつる菊河の涙千世ふるところなりけり

やかて佐夜の中山にかゝる、やう／＼のはりはてたる山のためは、尾花まゝとろに打ふし、あるりかれたてるさま、いとかなしけあるに、わかれつる愛松軒のあたり、そゝろふ思ひいつ

心にはかれすや猶もまねくらん目白の圃のまのゝ小すゝき

越えて、新坂よとゝまる、此さどお大須賀知白とて、世にまられし翁あり、又之鬼卵ともいふ、茶くむ女に、此をち猶たひらかなりやとゝへり、此さきつ日年ころの妻にねくれて、すなをちこよひ初七日のたいやに侍り、いといたとしきとゝいふ、こはひとたひ我門にも、入たちたるちなみあされり、さすかになしとさきて、さるころをものたまたゝめて、そのおくに

もろとも老ての後の若草のつまのわかれといかに悲しき

おもひやるこの山中の夜啼石よる／＼なかん君かこゝろを

と書殘せり、さてふけてのち板戸ひらき見るに、山の軒たかくそひえめくりて、大空も

いとせとまこゝちするに、みちたる月のさしのそきたらんやうに、いとすこらさえたる、まことにこゝろはそし

かへりても又や見さらん大空に照たる月のさやの中山

十六日、うるた川鴨海をすきて、潮井河原にいつめくちら山をくちら山といふあり

身にそしむ潮井河原の木枯は鯨山よりふくにや有らん

事のまゝの社も此わたりあるらん、今はまぢ／＼にひとりて、いつれの宮ともさためかたしどか

里人のまゝのまゝにやたひけせんいつくきりとも神とらうくらん

懸川の茶店に入てひるけものす、かたひらに僧のさけのみけるか、かしこをは手のこひもて引まき、墨染の袖まくり手にして、こゝの女に酌とらせてたこれわゝめくをみて、かの法師か心にかゝりてよまんとてよめる、みさを

五百かへり手なき罪をもわれうけんいさ／＼つけやあこれ其酒

さてそこを立出て

富士のねをこゝにかもひやかけ河の里をつれよりあらわれにけり
ちかとも

かへり来ていつかあそこの山あひにはのくみゆるふしの遠山
名栗に來れど、例の花むしる織かけたり、袋井のわたりより雨降出ぬ、西島の右に岩井
村といふ見ゆ、里人いふ、かしてはむかし鎌倉の右大將の君、あまたの鶴にこかねのふ
たを付て、放ち給ひし所にて、すなわち鶴の池といふあり、また其鶴いまに残りたるも
有て、いたく老たるか、をりく此またりおかりるを、見るとありなと語る

鶴の池にされも姿をうつし見て千代のむかしの影やこふらん

いとひづるまるしり空に残れども君か千世こそあとなかりけれ

三香野ふいづ

數ふればとや出しより廿日あまりみか野の原にけふはさよけり

春ものせしゆかりも、あなれば、見付のさとにやとるへし、まつまかりて物し侍らんと
て獨いそくめり、みさを

一夜ねてさゝつる春のつま琴の聲をしるへにとひやよらまし

けふは其まらへもさこえねり、その家もしられすといふ、雨も猶やまされの尋ねわひ
て、つひにかとやといふにどまる

十七日、空はむれたれと風いと寒し、ぬけ道をとめて一言坂にかゝる

故郷の人を見つけのさとならは傳へやらましひとことこの坂

大跡をゆけば中泉の里ふいつといふ、いてかの中泉のわたり、かしてさや遠つ神、あ
まつみまつり事さかんなりし大御世のそのかみ、さか後徳大寺の大實定公まうちきみ、國の
どころくまろしめし物し給ひつる、其中の一ところなりけんかして、ひそかにかうか
へまる事ありて、はるくおもひまゐらせやるも、今さらにいととかなし

名をさきて昔をくめは中いつみ袖になかるこゝちこそすれ

さて池田のさへ行興寺、湯屋御前の塚ありといふ、昔の事もなつかしくてふりてへて
まうつ、櫻の陰に石塔二基あり、ひとつと其母としのにて、此わたりすあそち長者か家
の跡なりといふ、刀自のかたむらなる卒都婆に、建久五年四月三日と書つけ、湯やのと

同く九年五月三日とあり、さらちや地主の花見の頃のいたとりに、其は、としの身まかりて、ゆやの子もた、四年とかりおくれてそこかなくの成けん、かの花のえんふ、なれし東の花や散らんとなかりて、心あきをも打つけに感せしめし、まとの至りはいふもさならなり、一首の姿さへ世にたくひなきをわかれと思ひ出て

花さくらいつれとまらぬ世の中をまとしのかりと散おくれけん
のりひて

たらちねを思ふねさしの深かりし職のそなと冬かれもせず

天龍川をわたる、さかまく流れいと早きよ、さす棹弓に似て舟箭のとし、思ひやれ天の中川なかりきてたゆたふ旅のこゝろはそさを、となけきたる、春のこゝろも更ふ立かへりて、ふたゝひうたふゆり、わたりはて、永田の松原をくるに、風をけしう吹て堪かたけれの、まつ濱松にやとりをもとむ
十八日、やどのうしろなる松原を望て、みさを

朝日影さしかはりけり有明の月の匂ひし濱まつの上に

こは此城のあるしの君、この水無月に入かりましてより、まつうこち給へる事とも、ねはやうかりうはて侍りなど、よへ家あるしのかたりしを、おもひよせたるこゝろとへもあるへし、さて名たかき濱まつ風やひきつらん、たれもかしらいたみこゝちあやましけれの、けふもこゝにさまる、つれづれなるお、旅宿の風といふ題を出して歌よむ、こはわひしかりつるよへのこゝろをいんとて也

吹わたるよりの嵐のいつとわれとねさめ悲しき濱まつの上
みさを

濱まつの上とふさわたる風のおどにかりねの夢をさましつる哉
のりひて

旅ねするさとの濱風とま松の霜をや床にのらひかくらん

猶こゝちあしけれと早くねにけり、いとむけにわかき時のゆめを見て、さめて後よめる
ゆめの内にかへりいなそのみねのさてみれの繕しく成まざるかな

十九日、風さむけれとてけよし、若林の松原をくれとうちわたせる田つらに、鶴あまた

雛をつれてたてり

さしのはる朝日の影を待うけて手を思ふたつの嬉しけに暗
のりひて

濱松のたま田にたてるあしたつのだつ朝おそき旅にも有かな
徳原馬郡をへて舞坂につく、新居へねたるの舟場なり、おのれ舟をひそるをふそるれ
の、のりもあへすかしらつさ入たり

さしてゆくあらの關のまらねともまつこえかたき波の上かな
波風のとけしき音もものおほえぬを、こゝちよけにうたふ聲す、のりひて

あらの海舟さしくれのあちむらのささく翼にしら波そたつ
ほどなく關のまへに舟つく、日もくたれたればやかて此さきにやどる、こよひ津島なる
氷室とよをさかもとへ文つかりす、其はしにかい付たる

時めかぬまつ心のはしらねともかけてそこふる藤浪のさど
廿日、朝とくいつ、けふものどけし、宿のとつれを橋本といふ、濱名の橋おと高師山など

いつくとふに、右のつゝきの山をは、おしあへてたかし山といひ、濱名の橋の所去れ
すとふ

残りける有明の月のたかし山まつよりうへに影しらみゆく
いかにせん濱名をとへと白須賀のまらすどのかりこたへけるかき

本白須賀を過て潮見坂をこゆ、右の方なる高みにのはれば、遠州灘めの下に見えわた
る、そこより左をかへりみれと、過てし橋本のわたりをかけて、かなたなる今切のみな
とまで、一方お打かさなりて見わたされたり

古へのたまなの橋ど今されのおとなき波そちわたりける
さて橋本の里の、もとより濱名の橋もなるへく、高師山はすなち此潮見坂なるへ
し、古歌にたかし山まつ陰より見おろせとはまなのとしを渡る旅人、といへるも此た
うけの眺望ならては、外にさるへき山あるへからそ、ふるく参河遠江のさかひに高師の
山ありとかけるもやかて其さかひの山なみなれ、今にのなへり、みさを

汝見坂枝さしおろす山まつの木の間もおなし海の色かな

いと長きたうけの上をくるほど、かへり見してよめる

潮見坂まつの木のままを行人の袖よそかへるおきつしらなみ

白須賀を過ぎてさかひ川をわたりゆけり、岩屋の観音はるかにみゆ、大岩村をひたりに入て、その大岩寺にまうつ、こは一むらの岩山にして、巖のおもて屏風のとく、高くそなたちていくとく丈といふをしらす、その上に大悲の尊像たちおとせり、みたけ丈餘におよふへし、直下にいたりて打仰き拜み奉る也、かの頂を鏡石峯といへり、けに銅佛のみかけ青天にうつりて、たふとくもいと物すこし、みさを

みそらよりくたりましけん御佛の御足を山そいたゝきにける

といへるをきいて

大御足巖なからにいたゝきておもさちかひをたのみけるかな

いとやの何かしと申す本尊の御堂と、巖のくはかある所の下にありて、天平の頃行基はさつ、一尺一寸の御像を彫刻して安置し給ふといへり、岩上の像の近頃の造立とみゆ、さて巖壁のうしろより、つひにかの頂に登る、御佛の御影のさらなり、四方の望み又い

ふとかりなし、それよりかなたさまにくたりて、大路にいつれば飯村のさとなり

廿一日、吉田をいつ、けふはいと、長閑お霞わたりて、やよひの空に似たり、豊川の大橋をわたりて、下五井にいつれば、いく重のおくにふしのねみゆ

打かすみのとせの山のそかひより今のとみゆるふしのたかねか

かきりわれのきえて跡なし時たらぬ雪を常磐と何思ひけん

走川をわたりて櫻町にく、此わたり鶴おはし、あるはむれる、あるのとひ行て聲になく、ちかども

なれもけふ心まかゝる雲なしと空にやあそふあしたつの聲

のりひて

雲の行どもをわふきてよふたつの聲さへ空にさこえける哉

國府むらの小松の原より、東北の方を見渡せり、都の北白河を神樂岡よりのそむに似たり、なつかしきこゝちして田つら遙かにさしいて、見れり、今となれつる松原の色さへ、今一しはのけしきをそへたり

霞のをか小田うち繩手打出てかへすくも見づるけふかな
さて此きわてをゆくくみれば、いとほのかなる嶺のうへに、糸すちはかりかゝれる
は、そなりやいかに

山のとふ出なんとする有明の影よりそはく匂ふふしのね

富士は吉田にて見ゆるをきんかきりといふなる、さるをこゝにして見出たるや、心わて
深からてのとはこるめり、御油にくれの風來寺へゆく道わりて追分といふ、みさをいと
く、五年とかりささあるへし、葉月の頃かの風來寺のわたりへ、物をしへにまかりし時、
此里より暮そめて、はむのか原の月のひかりに成て、むしの聲さまく鳴みちたる、あ
これにもおもしろかりし夜のさま、今にむすれかたしどかたる、けにや此原の月の夜の
望みいかならんと、むかしの人もゆかしみしをおもひあてせて

いにしへの人もはむのか原にまて見つらん月を思ひこそやれ

赤坂にくれのかあそひともはし近うぬならひて、あらしひ呼聲いとさわかしう、ねくら
をまむるむら鳥にくたり、此君なき家をとてえらひ宿るめり、こは此わたりのとまり

とまり、いとふかき世よりのなふのしにて、故郷とはき旅人の、草の枕におく露を、かつ
とらひかつそへて、きえかへる身のよすかとするも、すぐせとかなきわさならすや

むかしより色もかひらぬかえ竹のひと夜のふしそあこれ也ける

さてけふそ都の、大管會にておのすらん、日なみかそへあて、遙かにおもひ奉りやるも
いとかしこし、夜ふけてあふきみるに大空これわたりに、有明の月をみわたれり

大君のおはなめ祭きこしめす夜と霜雪はとゝかる空に月そきえたる

廿二日、つとめてうつ

うちとけてねさうし宿の朝手水氷なからにむすひてそたつ

おとの河千束川なとわたり行て、中柴のはどりにくれと、田つらの氷打けふり、山も
春めきたるに、藤川の名もゆかりありけなり、大平橋をわたる、井せきの音いはるかに
響きて、廣瀬のたひぶかになかる、いとのとけし、

夕日さす大ひら河の水のあやの影さへ底にうつりけるかな

過くれとひたりの方に小豆坂みゆ、麓の原ものすこく冬かれたるに、むかしの侍たちそ

ひて身おしむめり

まのすゝき入みたれけんものゝふの鎗のはにこそ見えわたりけれ

かけといふ所にくれと、岡崎人都筑おはなり、桑田たつおみ出むかへたり、ともなひて

此さとなる桔梗屋といふにやとる、夜ふくるまでさけ酌てかたりのゝしる、おは寄りうたふ

久かたの天とふたつの一聲をふたゝひさくも命ならずや

こと春はしめて契をむすひて、ふたゝひと見えしやみえんなど、よみすてゝわかれたるをおもへる成へし、たつおみも道のうへにつきて、こゝろえたかへる事など、みにさとりぬる事をよろこひて

大空のしくれの雨のかゝらすはいかて下葉の色にいつへき

廿三日、けふもつとひきて終日もかたりす、おはなりふたゝひ来ていとく、あすのあなひ申かてらに、八橋のあたりまで送りまゐらせんとこそ契り侍りしを、此頃うませたる子の、よへよりぬつのこゝち侍れり、其ほどはかりかたく、いと心くるしくも侍るか

あ、まつり別れの御杯さといひて

契りをやかけたかへんと八橋のくもてにこよひあやふまれつゝ

となんよめる、おのれいとく、まかしぬるみ給へるの、今このまたりとやり侍るときさくある、いものけにてこそ侍らめ、いとさいとひのことかな、むけにさのかりいとけあきはとみやみ給ふめるは、さゝめてかろらかに侍れば、たひらかにこそおとすらめ、かへり來ん春といとめてたう、みよろこひ申たいまつるへし

先こよひ三千年までとくみそめん今こんとるの桃のさかつき

廿四日、岡崎の町さかより右の野に出て、ちの道をゆく、伊賀川を渡りて矢矧にいつ、いづもけしきよし

矢とさ川わたす長橋なかけれり立たゆたえぬ人なかりけり

のりひて

のる駒にまかせてくれと三河路の矢とさの橋の長くも有哉

橋のこなたにくれと、はやくひるけの時なりや、めせゝとよひつゝ立よるめり

弓束とり矢とさの里の行袖を引まばりてもときたさうけり
暮戸にくれハ雨はろくハかつ

浮雲の村積山の雨を見ていとさくれとの里もかひなし

大濱を行に、ひたりの方にあたりて水鳥の聲すれハ、やかて分入る

大濱の小松ふみしたき遙かにも打出て、見るかみくらの池

いとひろくたへめくりておもしろき池なり、汀をつたひて牛田に出ればいとつよく降出たり、賤か機がる屋ふまをらく雨やとりするうち降やみぬ、さてかの八橋の跡みんとて、右の方あるあせ道をゆけば八橋の里なり、そこに無量寺といふ寺あり、その内に池ありて、冬なほかさつたさけり、昔の跡をこゝにうつし殘せりといふ、うれより在原寺にまうつ、一町をかり北なる岡の上に中將の墓あり、出つらのをちをわかひよて、其所見めくる、さて其をちかたらく、其かみ此わたりはみき海にして、此山邊まで波打よせて侍り、その時や、秦何かしといふくすし、ふたりの子をもてり、それを此海にてうしなひ侍り、その妻歎きままりて、かの子かうかひ出ん菩提のために大願心をかこし、

むかひの島よりこの山まで橋わたさんと誓ひて、水底をさぐるに、いと淺きところ八所あり、其所來つ、柱を立ちらへて、板をかけたさしより八橋とまうし、業平あそんもこれをはめて、さつなれにしつましおれはどのよみ給へるあり、實に此妻なくんハ、此橋たれかのかけ侍らん、そのとき都人の、おろそかに見すくし給ふわたりふは侍らす、おのれ所に年ふりてくとしき事を探りさめ侍り、たまハおのれ逢まゐらせすと、いかて其いそれを知給ハんと、こたいなるまふさまハ、ものして、ほこりたちいふかほに、汗うるほひて口ともり、耳鼻さへにをこめきて、岡のつかさにひらきたる、其なり猿にまたり、けに此里のさかし人なめりかし、かへり出て池鯉鮒の驛なる山吹屋にやとる、さるに江戸なる詩佛翁大窪行なこやよりかへるさにて、おなしく此家にやどれり、かねておのれに逢へきころかまへして、名護屋よりの文なども物し給へりとあるしのいふに、こはねかひたるにも似たるかな、おとのみ聞つるものをと、やかて高殿よりおりておひまみゆ、夏より江戸を出て都をもめぐりをへて、やうくこゝまでかへり出侍りなどかたりあへす、一卷をどう出て見せられたる、こはさるどころくよて

作られしから歌若干なり、中に就てなるけしきを、わひたぐに給か、せてのせられ
たる、くりかへしつゝ、かつとひ、かつ見、まふすはめにをこめさぬ、かへりきてる中の
一二をわく、いとめてたさも多かめりしをわすれにけり

萬碧樓作

宇治橋頭日欲頽、紅楓兩岸錦成堆、不知一道中間水、劈
破青山幾許來、

發土山抵鈴鹿途中風雪大作

雪正晴時擡首看、峯々爭立白辱顏、然斷陰翳無別語、軟

紅光裏湧銀山、

春樵諸人邀飲於四條橋酒樓

莫折一枝簪白頭、渠縱不愧我應羞、近來自覺情懷淡、老

與名花風馬牛、

暮てのち、半開の梅花を瓶にさして、これ見よとておこされたるを、まどらく見めて、

かへしおくるついでに、かいらへたる

大窪ぬしにこよひしも、此やとよしてま見えまらするたにあるを、梅かえの
あまりふとく咲たるかめつらしけれとて、いけたるさなからもたせおこし
てさへ見せ給うけるは、いとたしけなきものから、そふへき一くさの猶たら
さめるこちするを、わかぬ方打うらみて

鶯の聲そきこえぬ梅のとな早く見たるはうれしけれとも

梅花一夜のとめしうつり香にをらぬ袖をもうたかおれなん

ものいふ花も立まする宿なれの老の心もひかみてなん

廿五日、おきなどくよりのはりさまして、何くれのものかたり時うつりぬ、さてよへの
かへしなりとて、扇どう出てさしおかれたるをひらき見れば

擔頭挿得早、棹來爲使人知、春信回何計、幸逢幽賞客、一

枝香雪化瓊瑰、

けふしも至日なれば、さるころをふくめられたり、又わかれんとする時よへの作なり

とて、かい付おかれたる

與君同是風流客、邂逅相逢旅中、一夜閑談不須睡、明

朝分レ手各西東、

山田居敬といふ人、翁といふおやとれり、これよりもかの梅の心へなと、文に詩にか
いまるしおくふれたれと、あまりに事長けれのこにもふしぬ、また此人名や所やとひ
たるに答へて、みさを

自知天地三十年、寒餓嚼氷膽如鐵、單身去國今西飛、青

鬚狂兒名是節、

ひるの頃立んとするにあるしいとく、此春やとり給ひし時、かさ下されし桶狭間の御歌
をり、表具せさせ侍りて、今南おもてに物し侍り、これひも御まゐるしのかりに、何にても
と乞やまぬり、とりあへすつかりしたる一ひら

榎葉園にやとりてよめる

天地のいとぬ色にはおはへともとぬ人きき花の宿かき

此あるしひ、篆刻などものして、世おまられたるすきもの也、ちりふの宮にまうて、今
岡今川をすき阿野にいたる、きよらなる道のくまぐ、それとはなしにこゝろゆくわた
りなり、みさを

おもしろき道にもあるかな松原の絶間くにかゝるゝに橋

せんこの里にいたり、たつみやといふに入て、さけのむついでに、二村山といふ此あ
たりおきしやとへは、あるしいとく、こは是よりたふ十町とかりわけ入給へり、二
村山にて侍り、やかて其麓いにしへの鎌倉海道にて、其道より鳴海の宿へ出られ侍れ
は、さりかりのまのりにておとさし、必見て行給へ、さるかたおかしき山也、されど
道もまゐるにて、山もいつれと見給へわさかたく侍れば、あなひ人つれ給へとて、さど
人ひとりやとひ出てもせさせたり、心わりけるをのこなりけり、けふの道もいたくお
くれ侍れり、かへりこん春物し給へんもおそからしなといふ

東路の二村山のふたへひを待へきものかいさこえゆかむ

ひかしへむかひてかのこみちへのほりいる、馬こめ沓かけなど見わたすけしきまつよ

し、かれなん二村山也といふ方をみれり、けに打つゝきてなたらかある山の中に、其わたり二むらにそわかれたる、さてたうけにのはれは地藏堂あり、海より野原見めぐらすに、たつみの方のさのふこし方にて、かきりなく打ひらきたる田畑なり、かの光行かくたけし時、明行するの波路なりけり、とよめるにはたかへるこゝちとする、けにむかし鳴海より引めぐりて、さる海原なりけんかし、八橋のをちか空ものかたりに、まめともましりにけりて笑ふ、すへて此山岩はもなくて、いとなめらかなるものから、とこそろく高くかけくつれて、岸めく所おはきに、其くえあられたるにの色おひ、こき薄く打句ひて、うつくしき事おもやあり、いにしへのにすりのさぬもおもひ出らるるに、すへてもあつしきこゝちして、堂の横木にかい付たる

から錦二むら山の一村はとりて都のつごにもていなむ

さつきの頃、まけなりを都へかへしつかのせし時に、玉くしけ二むら山の明かたに名あり出たるはとよきすかな、とよめりしと聞つるは、此わたりなりしや、僧世におやまてる三河路なる、法藏寺の山ありしやいとおはつかなし、そのかみ能光西行などの、この

三河路なる、法藏寺の山ありしやいとおはつかなし、そのかみ能光西行などの、この
さつきの頃、まけなりを都へかへしつかのせし時に、玉くしけ二むら山の明かたに名あり出たるはとよきすかな、とよめりしと聞つるは、此わたりなりしや、僧世におやまてる三河路なる、法藏寺の山ありしやいとおはつかなし、そのかみ能光西行などの、この
さつきの頃、まけなりを都へかへしつかのせし時に、玉くしけ二むら山の明かたに名あり出たるはとよきすかな、とよめりしと聞つるは、此わたりなりしや、僧世におやまてる三河路なる、法藏寺の山ありしやいとおはつかなし、そのかみ能光西行などの、この

し、かれなん二村山也といふ方をみれり、けに打つゝきてなたらかある山の中に、其わたり二むらにそわかれたる、さてたうけにのはれは地藏堂あり、海より野原見めぐらすに、たつみの方のふこし方にて、かきりなく打ひらきたる田畑なり、かの光行かくたりし時、明行するの波路なりけり、とよめるにはたかへるこゝちとする、けにむかし鳴海より引めぐりて、さる海原なりけんかし、八橋のをちか空ものかたりに、まめともましりにけりてとて笑ふ、すへて此山岩ほりなくて、いとなめらかなるものから、ところろく高くかけつれて、岸めく所おほきに、其くえわらへれたるにの色あひ、こき薄く打匂ひて、うつくしき事めあやまり、いにしへのにすりのさぬもおもひ出らるるに、すへてもあつしきこゝちして、堂の横木にかい付たる

から錦二むら山の一村はとりて都のつとにもていなむ

さつきの頃、まけなりを都へかへしつかのせし時に、玉くしけ二むら山の明かたに名あり出たるはとくすかな、とよめりしと聞つるは、此わたりなりしや、僧世にあやまてる三河路なる、法藏寺の山ありしやいとおほつかなし、そのかみ能光西行などの、この

二村山を三河と思ひてよまれたるの、此山のなかれ、ほとくかの國のさかひにもおよひたればなり、昔といと深く入たちしきるへし、まして東よりのほる人の、まつふむかたにつきても三河のものと思ふらんかし、さて山をくだりにいぬむとて一里とかりくれり、鳴海の里の橋つめに当たり、日もくれぬ

行くらしつとも見えす鳴海かた千鳥のかりもさるへにはきけ

かのわゆる瀧の櫻田も、このわたりよりみゆらんものを、いふかひなし、笠寺なりといふよ、いとくちき空にけふとくそひえたるは櫻門にや、此頃あらたふいとなみ立られて、いまた木たくみの手も、のこりなくとなたぬはと也といふ、やかて其門より入て通り行に、紅梅さかりに見えし、春のおもかけうちにはひて、なつかしう見やらるれど、其木立さへいつて成らんあやなし

此たひの世にもまのひの道なれどかくれ空てら闇にこそゆけ

そや過る頃、みやの驛なるさのくにやにゐる、まよをさより文ありていとく、明日はまつ名こやなるおのかきり所に入給へ、おのれもさつ日津島を出て、こゝにむかへまゐ

ちせて待ひ侍り、いかてかくと日敷のゆるひ侍る、など書て

旅衣たちそめしよりけふくとおとさく山のまつとしらすや

この山松をしらすして、時めかぬ松の心など、過したよりにいひおこせしひおもなくや
廿六日、熱田の大宮にまうていなこやへと出たつ、雨ふりていと寒し、けふ都なるする
かの守まけのふかもとへ、文遣すにそへたる

春くともいのらぬ瀬にそかへるらん水あつたのみたらしの涙

このさきくぐの便に、かならす都へかへり入ぬへくいひおこせしかと、これより伊勢路
にめぐりどまりて、こち吹出んまふく猶引かへして、かきたさまにむかひぬへけれ
と也、さてかの別業にいたれば、あるしとよをさ待うけて、こたひの岐曾路をこそと
もひ侍りて、日くによみ出ぬる歌さへいたつらに成侍り、その葉をたにふみ見給へと
て、かい出せり

こえわひん岐曾の山路にふる雪の積る、いたひの日敷なりけり

岩むせふ谷の水おとさく、きらし幾重の山か君のこゆるん

またこゝある^{森野翁}、よそなからおのれを待ひて

都人わたらんさそのかけとしを心にかけてまつくるしき

となんよまれしなど、何くれ聞あつむるに、とりくかたしけあしや、けふしも、みやこ
あつまのたより、ひとつにきこえたり、まつ東の文をひらき見るに、あやをかもとより、
湯本のたよりをさく侍りてと書て

とこね山せきのこなたとさくはどの跡おひてもとおもひしものを

愛松軒なるとき^時子よりも、過つる日に思ひ出てさか

君はけふいつこの里にとまるらんふく風さむくみそれ降ける

みやこのを見るに、柏原のとし^時子より、秋はかへり給へんとこそうけ給り侍りしを、い
かに今までいものし給ふらんと、うしろめたらうささうちわらひて

秋風のふくにつけてもとのかりに軒端の萩をかめつるかき

かへりこん事もあすれて隅田河すめは都となれやしつらん

さはかりに君長むせは故郷に待人なしと人やおもはん

など書つゝけたり、さてこよひの旅こゝろも打ゆるひ、心ゆくかきりくみ更してゑひふ
 したるものから、なほ夢路の中空おそたどるへき此にきりやどりくのともし火のも
 とにてその日の事ともわすれぬまにといそかひしうかい付たる中にすこし歌めきたる
 事の所をそのまゝぬきいてたるに侍れはまへまりへまどけなういにしへの年月をさ
 へ考へたかへる事たに見え侍りいとんやふみかく筆つきにも侍らぬの今この打とけし
 友とちの外にはさらに見えさこゆへきものにあらすさるも猶時れくれてと何の興かあ
 らんとせめてそとやく物し侍りし又とく引もやりつへし

文政のとしめのまとす一日つしまなる梓園にてしるす

景樹

明治廿三年十二月二十二日 印刷
 全 年十二月二十三日 第一版

大阪市東區北久太郎町四丁目百二十四番屋敷
 圖書出版會社名代人

發行兼編輯人 梅原忠藏

大阪市東區德井町二丁目六十八番屋敷
 前野活版所分店

印刷者 前野茂久次

版 權 有 所



版權登錄

發行所 圖書出版會社

大阪市東區北久太郎町四丁目百廿四番屋敷

圖書出版會社藏版甲部賣捌所

大阪市東區備後町四丁目

梅原龜七

同 東區備後町四丁目

吉岡平助

同 東區安土町四丁目

積善館

同 東區北久太郎町四丁目

岡本仙助

同 東區北久寶寺町四丁目

濱本伊三郎

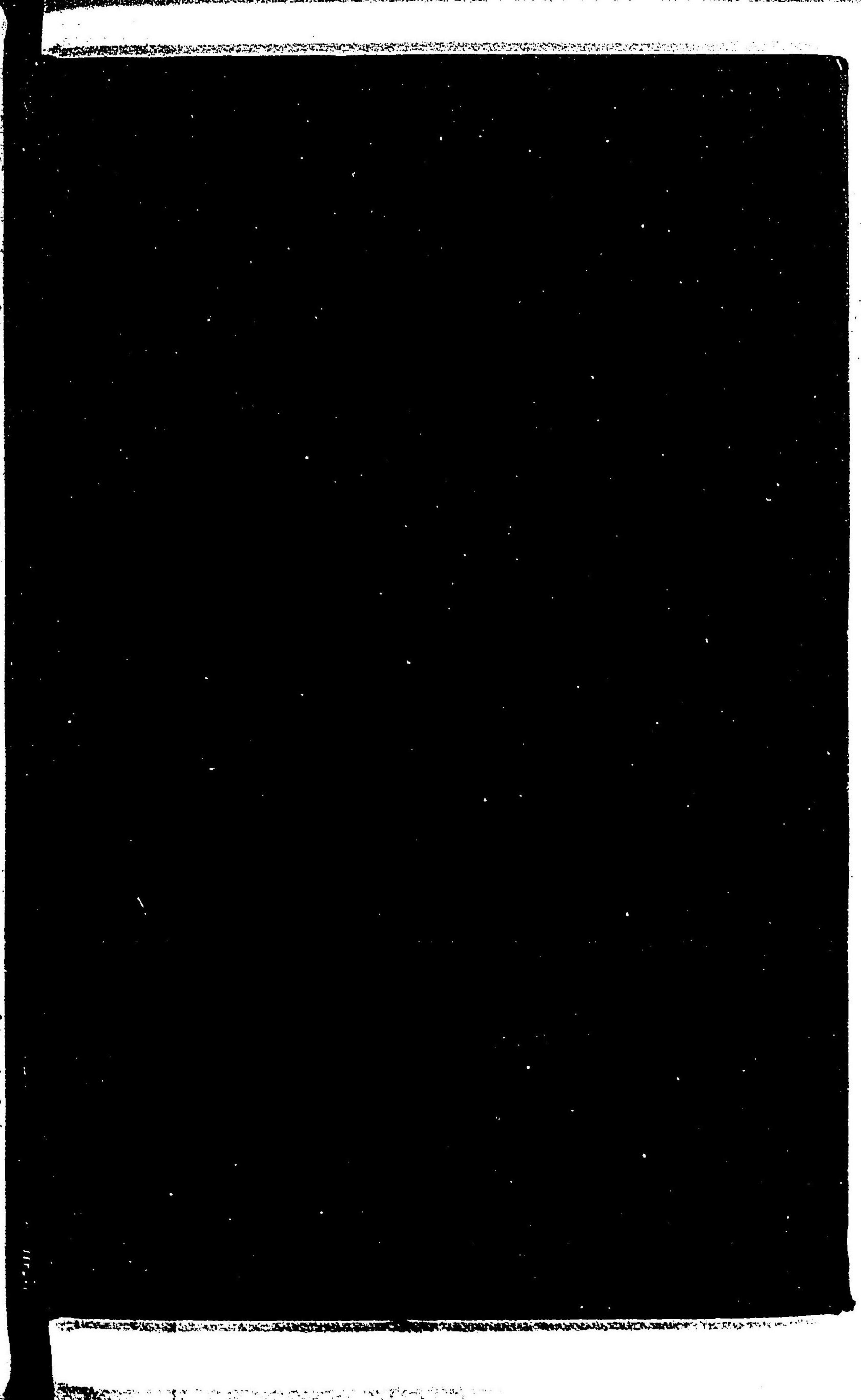
同 南區心齋橋北詰

中村芳松

同 東區淡路町三丁目

金川善兵衛

42
18



42
18

095866-000-3

42-18

土佐日記創見

香川 景樹/著

M23

DBR-0078



